HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	式辞等
Citation	北大百年史, 通説, 1071-1141
Issue Date	1982-07-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/30052
Type	departmental bulletin paper
File Information	tsusetu_p1071-1141.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

式辞等

1 東北帝国大学農科大学開校式における佐藤農科大学長式辞

（一九〇七年九月一一日）

地を拓き民を植ふるは、経国の大本にして為政の要務なり。学を建て士を造るは、文化の要道にして治国の本源なり。恭しく惟るに、明治維新皇上万機を親裁し給ふに当り、広く宇内の大勢に鑑み遠く国運の将来を察し以て中興の国是を定めらるるや、首として我北海道拓地植民の鴻謨を布き国家永遠の富源を開き人文旺盛の基礎を立てらる。是に於て時の職司黒田開拓長官は能く聖意の在る所を奉体し鋭意拓殖の進捗を図り、同時に学制を振興し人材を養成するを以て急務となし、俊秀の子弟を撰び日新の農理農芸を講究せしむ。是れ即ち札幌農学校の濫觴なり。

爾来星霜を積むこと三十有余年政務学則共に幾多の沿革ありと雖も、要するに時勢の進捗と文運の勃興に伴ひ、拓殖の実績益々顕著にして富源の増大なる滾々として尽きざるものあり。育英の事業又大に伸張し有用の人材を輩出すること少しとせず。翻て此間に於ける我国内外の形勢を観察するに、国威八紘に加はり皇沢遐邇に覃ひ、北樺太の旧領土を復し南台湾の新版図を広め満韓の施設又帝国の経綸に待つもの多端なるを以て、人材の需用日に月に加はり育英の事業又益々急なるものあり。

顧ふに文物の興隆は国家元気の発動に基く。明治九年本校の起るや札幌の人口僅に二千人四囲常に蛮烟瘴雨に蔽はれ実に荒涼寂莫の境たり。然れども笈を負ひ来りて此校に学ぶもの時代の精神に富み進取の気慨に乏しからず。十五年廃使置県となるや学事又一頓挫を来せりと雖、十九年廃県置庁に至て拓殖の気運再び勃興し本校教育の機関又稍々面目を改む。既にして憲政実施の始めに当り経費削減の非運に会し本校の存廃未だ知る可からざるの極に達す。二十七八年日清戦役後忽ち実業の進捗と其教育の発展は漸く既往の頽勢を挽回し、校舎の改築の挙あり三十六年新校舎の落成を見るに至る。未だ幾ならず日露戦役後

の影響始めて一大発展を為す気運に向ひ、学科の増置と共に諸般の設備を完了し内外相待て益々其特長を発揮し、遠く海外より留学生の来るあり、又卒業生の供給殆ど其需要を充たす能はざるの勢なり。今茲遂に東北帝国大学を創設し本校を以て農科大学の組織に改め、更に学科を増設し定員を増加し大に其規模を拡張するに至る。是れ国家文運の隆盛なると文教当局の規画其宜を得るに因ると雖、抑も亦時勢の要求と輿論の後援之をして然らしむるに非んばあらず。吾人此盛時に遭遇し欣喜措く能はざると共に転た今昔の感に堪へざるものあり。

今や本道は交通機関大に備り陸に鉄路の貫通するあり海に浩湾の修築するあり、田野大に闢け物産盛に興り山林の富河海の利尽く開発せられんとす。之を三十余年前の榛莽天を遮りて昼尚ほ暗く熊羆途に当て人畜を害するの時に比すれば其相去る天淵啻ならず。而して此の隆盛に至るは、畢竟維新当初の宏遠なる廟謨の現実するのみならず農政の拡張と文教の発展と相須て然るものなれば、将来実業の開進に随ひ農工林業水産を論せず学理と実務の密接なる関係益々深きを加へ、本道に於ける本大学の位地は更に重要なるべきを知るに足れり。蓋し学校の生命は永遠無窮に渉るべきものにして歳月と共に益々改良発達するを要す。之を例すれば米国のハーバート、エール両大学の如きは其建設の初に在ては徴々たる植民地の一校に過ぎざりしと雖、今や世界有数の大学たり。本大学は僅に三十余年の経歴を以て漸く学海に出んとす。将来に於て層一層の大発展を期せざるべけんや。

凡そ学理は世界を通して動かず学芸は天下を共にして偏らず。先哲に鑑み後賢を啓き造化の妙用を闡明し宇内の大経を弼綸するは学者の本務たり。況んや輓近国運の発展は人材に期待する最も多大なるをや。故に其学術技芸の俊秀卓越なる者と其人格気象の高潔雄大なる者とを以て膨脹的帝国の鴻図を翼賛せしめんと欲せば、高等の教育益々発展を図らずして可ならんや。果して然らば本大学の任務又重且大なりと謂ふべし。

本日文部大臣閣下の臨場と朝野貴紳の参列を辱ふし此開校式を挙ぐるを得るは特に昌介等の光栄とする所なり。希くは自今以後益駑鈍を尽し相共に学生生徒の訓育指導に従事し、以て国家と社会の須要に応ずるの実を挙げ、上は以て皇上の優渥なる聖意に対へ奉り下は以て天下万衆の嘱望に辜負するなからんことを期す。聊か所懐を陳述し以て式辞と為すと云爾。

明治四十年九月十一日

東北帝国大学農科大学長
従四位勲三等農学博士　佐藤　昌介

（『文武会々報』第五二号、明治四〇年一二月）

2 東北帝国大学農科大学開校式における牧野文部大臣祝辞

（一九〇七年九月一一日）

北海道は風土気候其他社会的事情により、速かに大学を設立すべき好位置たるにも拘らず、国庫財政の点よりして其機運に進まざりしが、幸に古河家が百六万円を九州及東北大学設立費に献納せん事を請ひ、且つ其使用に就ては無条件なりしが為め茲に始めて其機運到来し、漸く予算を編成し前期議会の協賛を経て今日あるに至りたり。茲に於て古河家の美挙は永遠に紀念すべきものにして、蓋し本大学の歴史上特筆大書すべき事に属す。

偖て今日は学理応用の時代にして、此の時期に際して本大学を開き専門智識の本部を成立せしは蓋し本道人士一同の大に満足する処ならん。顧ふに本大学は学術の蘊奥を究むる所なれば、教官学生の専心一意之れが研鑽に努むべきは勿論なりと雖も、只是のみにては未だ足れりとすべからず、其研鑽の結果は務めて実地と接近すること甚だ必要なる事なれば、可成実地に応用することを主として予め其結果は広く世間に発表し、以て利益を社会に頒つの方針を取られん事を希望す。此事たるや独り本邦に於てのみ必要なるに非ず、欧米諸国の如き夙に此の方針によりて数十年来汲々として茲に務めつつあり、即ち学問の淵叢たる大学に在りては其学術の蘊奥を研究すると同時に、之を実地に応用する様広く一般に之が結果を発表して国民を指導することを重なる目的としつつあり。是故に新に開設する大学の如きは、殊に此の方針を以て平民的の施設となせり。現に頃日新聞紙の報道を見るに英国皇帝は過般大学の為めウエルスに行幸在らせられ、其勅語中にも此の意味を以て大に奨励せられ、学理を基礎とする大学の改進を企画することに軫念を労せらるる事を報ぜり。又米国の如きも高等教育に重きを置き、主として此の方針によりて国民を奨励しつつあり。故に本大学の如きも専ら此の方針によりて進まれん事を希望す。

次に尚二三の希望すべき事あり。此の席を借りて之を述べんに、

第一　従来の教育方法は所謂詰込主義にして、学生の学校にあるや唯卒業証書を得んが為めにのみ修学し、一度卒業するや、更に学問の研究をなさず全く之れを等閑に附するの傾向あり。是れ実に憂ふべき傾向なれば、学生諸君は仮令卒業後と雖も益々研究を怠らず終身学問の為めに忠実ならんことを望む。

第二　近来全国一般に学生の外国語に於ける素養乏しきことなり。此の事は主として大学教授に依りて唱道せられつつある

が、此の言たる不幸にして事実なり。今や時勢は駸々として進歩し、学術技芸に社会万般の事外国語を応用するの範囲益々広大となりたるにも拘らず、此の不幸なる事実あり、本邦学生の前途実に寒心に堪えず。凡そ外国語を熱心に研究するは独り新智識を得るのみならず、学生一身の修養上に於て其処世上に於ても最必要なる事に属するが故に、学生諸君は深く茲に留意せられん事を要す。

第三　樺太半部は日露戦役の結果帝国の領土に帰したるに就ては、将来同島の経営は専ら北海道人士に待たざるべからず。聞く所に依れば同島の利源其他一般の事未だ充分の調査を経ずと、蓋し是等の調査研究は当大学に於ける適当の任務ならんと信ず。故に当大学に在る所の諸君は此の点に於ても深く留意せられんことを望む。

之を要するに北海道は明治の世に於て成功したるものの尤も大なるものにして、又札幌農学校は北海道に於て成功せしものの尤も大なるもの、而して今回当農科大学の成立は実に他日独立の北海大学を成立せしむべき基礎なれば、諸君は深く此の意を諒して本大学の美果を収むる様大に努力せられん事を切望す。尚ほ終りに臨み特に一言すべき事は本大学は今や如斯にして芽出度成立し、且つ多数の教官各其人を得て善良なる教育を受けらるるは学生諸君の至大なる幸福と謂ふべく、畢竟するに如斯は一に聖徳の然らしむる所なれば、諸君は寤寐聖恩の優渥なることを忘れざらんことを望む。云々

（『文武会々報』五二号、明治四〇年一二月）

3　東北帝国大学農科大学創立第六回記念式における佐藤農科大学長式辞

（一九一五年六月二二日）

明治四十年今月今日東北帝国大学設置の勅令発布せられし以来、年々是の日を以て本学の記念日と為し職員及学生々徒諸子と共に一堂に相会し聊か賀意を表することとせり。然るに前二箇年間は時恰も諒闇に際したるを以て此の式典を欠除するの止むを得ざるに至り、茲に本日を以て第六回の式典を挙行することを得たるは大に欣幸とする所なり。倩々思ふに欧州未曾有の大動乱は年を弥りて尚未だ戢まらず、世界の通商貿易殖産興業等より諸般の文物制度に至る迄多大の打撃を蒙らざるはなく、殊に戦乱の中心点は世界文明の中心地なるを以て其の学術の進歩を妨げ奎運の発展を阻害すること挙げて言ふべからず。苟も身を学界に置く者は誰か痛嘆せざらん。宜しく狂瀾を既倒に回すべきの覚悟を以て此の際益々奮励努力し、以て学術の独立を図り世界に於ける利用厚生の道を全からしめざる可らず。且夫

れ農学の如きは近時科学の進歩に伴ひ彼の細菌学、特有作物学、育種学等を始め其の他研究を要すべきもの益々多く、且愈々密に入り殆んど際涯なからんとす。故に斯学者は其研究室に講習室に将又野外に、常に孜々汲々として研究に研究を重ね闡幽徴顕斯学の為益々光彩を発揮し以て後進の指導誘掖に努力せざる可らず。而して後進者に在りても亦深く茲に留意し一層研鑽の功を積まざるべからず。我が農科大学は学術界進歩の趨勢に鑑み、一昨年の新学年より大に学科課程を改善して農学科を三部門に分ち且学生諸子をして学科目の選択を許し、必修時間数を定めて其の専攻学科の蘊奥を究めしむることを期せり。其の効果は漸次見るべきものあるべしと雖も未だ之を以て足れりと為すべきに非ず。講座の数の如き年を逐うて益々増置せんとすると共に其の他各実科の設備も次第に拡張せんことを期す。幸ひに本学には篤学にして熱誠なる同僚諸君の在るあり、早晩其の美果を収むるに於て遺憾なきを信ずると共に、併せて本道拓殖事業の発達に努力し邦家の福利を増進し広く世の利用厚生の上に貢献せられんこと希望するや切なり。本学は又物質以外に於て数十年来発揮し来れるの一学風を有せり。此の学風は教官と学生生徒との間常に融照輯睦し切偲砥礪相共に善を責め以て馴致し来れる所に由ると雖も、畢竟多年帝室奨学の優恩に浴すること深大なるに由らずんばあらず。殊に本学に在る者は同心一体益々其の徳を磨き、上は以て此の優渥なる聖恩に酬い奉り下は以て国民の本分を完ふせざるべからず。聊茲に所懐の一端を述べて式辞と為す。

大正四年六月二十二日

東北帝国大学農科大学長
正四位勲二等農学博士　佐藤昌介

（『北海タイムス』一九一五年六月二三日）

4　北海道帝国大学創立第一回記念式における佐藤総長式辞

（一九一九年三月一日）

（前略）曩に二十七八年の戦役起るや、帝国は戦勝の光栄を有し国威を中外に宣揚することを得たり。是れ畢竟国家の干城が勇武以て難に当れるに由ると雖も、亦国民教育の普及は義勇奉公の精神を発揮せるに基くものと謂はざるを得ず。是を以て戦後益々武備を拡張すると共に教育を普及するの要を認め、殊に実業教育の振興を以て国本を鞏固ならしむる所以の道なりとし、本学の前身たる札幌農学校の如きも漸く拡張の機運に向ふことを得たり。

爾後十年間は内治に外交に国運益々隆昌に向へり。然るに国

難再ひ起り露国と干戈を交ゆるに際し再び強露に勝つて大に国威を中外に発揚せり。是に於て乎文教武備の進展は帝国の如き新興国に於て益々其の急務なることを認むるに至れり。

東北帝国大学設立の計画は実に日露戦役当時に胚胎し、明治四十年創立せらるるや、札幌農学校は其の農科大学として独り東北及ひ本道に於ける文物の淵叢たるのみならず、広く欧米の学術界と相交つて益々文運の隆興に資する使命を帯べり。

帝国の歴史は凡そ十年を以て一期とし新局面を展開す。然も転機一回を重ぬる毎に其局面を進展して止まず。是を以て国家的より国際的に渉り帝国は益々世界的地位に上るを見る。日清の戦役は帝国をして東洋の強国たらしめ、日露の戦役は更に世界の一等国に進ましむ。大正三年塊塞の変は遂に世界の大動乱となり干戈結んで解けざること五載、露国は崩壊し独墺は敗亡し今や媾和の機運到来其論戦酣なるの時に当り、帝国は実に世界五強の一として万邦の尊重するところとなり、其信望其地位弥々益々向上するに至れり。此際此時北海道帝国大学は独立綜合の制度を取つて創立せられ五帝国大学の一に列し、札幌なる学都に於て大学の権威を立つるに至れり。而して今や其一周年祝日に遭遇す、欣懐何を以てか之に加へん。

思ふに学術は国境を有せず学理は共通性を有す。天下何物も学術学理の探究を妨ぐるものなし。霊智を以て自然の玄理を闡明して之を人生の利用に供し其幸福安寧を増進し以て造化の恵与を普及せしむることは、是れ学者の人類に対する責任にして又国家に尽すへき義務なりと信ず。抑々明治の初年本道の拓殖創業の際に当り、早くも高等の学術技芸を修むる人士を養成し以て本道の拓殖に貢献することを期待せる先進の計画は、寔に時代の要求に応せるものなりと謂はざるを得ず。爾来星移り物換り国家の進運と共に幾多の変遷沿革を経て今日本学の第一周年を記念するに至れり。先進の遺業を継承せる本学の使命は亦重大なるものありと謂はざるを得ず。

ヴェルサイユ会議は国家及び社会の改造を討議しつつあり。学術界も亦此の時運に処して向上発展を期図するところのものなかる可らず。即ち国民教育の普及を図るが如く又高等教育の普及を図らざる可らず。少数の国民のみを知識階級たらしめずして多数の国民を知識階級たらしむることを要す。蓋し高等教育は国民の全般に及んで始めて国家は理想の文化に進む事を得べき者なり。国際間に於ける経済上の機会均等が我邦民の理想なりとすれば、国家内に於ける経済上の機会均等も亦国民の理想たらざる可らず。其の特権特法は之を制限して国民の共通権利を尊重し、経済上の実力に於て其の懸隔大ならざることを要す。是に於て乎高等の教育も益々進捗して学界は愈々発展し其の自由研究力学術の利用を普及せしむることに至らん。思ふに

国家は健実なる思想を有する国民の上に之を形成せざる可らず。学に最高の学府に就く者は殊に国家の由来するところ又国体政治に関しては其の淵源を闡明し、国民を啓発すると共に各自国民道徳上の思想を涵養する所なかる可らず。

帝国は即ち万邦無比の国体を有し万世一系の君主を戴き以て国民の慶福を増進す。是を以て帝国臣民は常に上皇室の尊栄を無窮に擁護し憲法の精神と国体の精華とを発揮して以て宇内の民族と相対峙することを勉めざる可らず。此の如き国家に生を享くるところの吾人は一面に於て最高の学術を修むると共に一面に於ては各自人格の修養を積み、改造せる世界の新舞台に於て最高学府の権威を樹立せざる可らず。苟も此の如くんば吾人は帝国の国是たる文教武備の伝統的宏猷を翼賛して国家に酬ゆることを得るに至るべしと信ず。（後略）

（『創基五十年記念北海道帝国大学沿革史』による。『北海タイムス』一九一九年三月二日により補う。）

5　北海道帝国大学創立第三回記念式における佐藤総長式辞

（一九二一年二月六日）

本日を卜し北海道帝国大学創立第三回記念式を挙行するに当り同僚各位及学生生徒諸子と一堂に相会し一言式辞を述ぶることを得るは予の最も光栄として快心に堪へざる所なり。

回顧すれば明治四十年東北帝国大学の設定せらるるや、旧札幌農学校は其の農科大学として組織を一変して先駆を為せるが、大正七年北海道帝国大学の創立せらるるや、東北帝国大学農科大学は更に北海道帝国大学に編入せられて再び其の先駆者たる歴史を繰返すに至れり。思ふに明治四十年に於て東北帝国大学と同時に設立せらるべき北海道帝国大学が大正七年に於て漸く其の創立を見るに至れるは、蓋し当時時機の未だ熟せざるものあり計画の未だ全からざるものあつて十年の歳月を要せるものなり。而も奎運は刻々進展して止まず時勢の変転も亦暫らくも休止することなく、遂に大正七年三月北海道帝国大学の創立を見るに至れることは誠に慶賀に堪へざる所なり。

蓋し重大なる使命と遠大なる希望とは新大学の創立に伴ふものなることは固より言を待たず。医学部の開校に次ぐに工学部を以てして農、医、工の三学部の並立を見るも応に三四年の間に在るべきも、是固より北海道帝国大学の全部に非ず、理科に法文科に商科に経済学部等漸次設立せられて其規模益々拡張せられ、本大学の使命のある所を実現せざる可らず。思ふに大学は時運の進歩に伴ひ益々其内容を改善し其の輪郭を拡張するの必要あるを以て、大学に関する現今の法令制度も他日其の改正を促かすものあることを要す。果して然らば或は法学部より政

治学部を分ち文学部より宗教学部を離し農学部より水産学部を割き、其の他航空、美術、音楽、体育、師範、通信、図書、新聞等の新学部又は新学科を増設するに至るべく、況んや若し男女共学の制度を取るに至らば家政経済学部の如きものを設置し多々益々諸般の学術技芸を研究する所の膨大なる綜合的教育機関たるに至るべきことは、人智の進歩学術の発展の大勢より見て了知すべく必ずしも智者を待つて後之を知らざるなり。

本大学は創立以来年を経ること僅に三回に過ぎざる新進の大学なり。然れども千歳の寿齢を重ぬべき恒久的最高学府としては、職に本学に在り学に就く者に対して国家が多大の期待を有すべきことは当然のことなりとす。思ふに大学は自由研究を以て天才を発揮すると共に勉学修養を以て智能を啓発し徳性を涵養するところの試練場たり。篤学の人は終身学んで猶其の足らざるを覚ゆべし。況んや三四年の在学は学界の前途遼遠なることを自覚せしむるものあるべきに於てをや。然れども普通教育の進歩に伴ひ基礎的学科の修養充実し、随て高等教育の能力は昂進して高等学府の出身者が国家の期待する有用の人材たるに至ることは信じて疑はざる所なり。世界大戦の結果は有形に無形に大変動を世界万国に及ぼせる事は言を待たざる所なり。協商諸強に対しては国際聯盟が恒久的平和を戦争に訴ふることなくして之を獲得せんとする努力を見るに至れるが、同盟諸強に取つては或は分裂削封となり或は政体の変更となりて今猶国民は生活不安の惨状に苦吟しつつあり。露国に至つては土崩瓦解未だ中央権力は確立せられずして過激派の圧制は戦時の惨禍よりも猶甚しきものあつて国民皆塗炭の苦中に在り。国際聯盟をして真に結合鞏固なる団体にして其の主張に忠実なるものたらしめば、早晩露国の現状を黙視すること能はざるべし。或は止むを得ず遂に国際武力を以て之に干渉し以て世界の平和を来たすことを努むるに至るべし。是に於てか国際主義なるものは結局国家主義の上に建設せらるべきものにして、軍備の縮少も其の一員たる国家の自存自立に必要なる限度以下に之を制限すること能はざるなり。強大なる国際聯盟は強盛なる国家諸員より成立するものたるを知らば、国際主義を高唱すると共に又益々国家主義を主張せざるべからず。故に教育は即ち第一に国家的人材を陶冶することを眼目となさざるを得ず。世界大戦未だ酣なるに当つて英国が教育制度を拡張して其の普及を図れる如きは蓋し国家百年の長計たることを失はず。抑々学問に国境なく学者に差別なきことは天下の通則なりと雖も、国民各自は国家の一員として其の個性の完成自立を図ると共に国民として其の国体を擁護し憲法に遵ひ法律を守り法治国の良民として進んで文化的事業に努力すべきことは貧富階級の差別なく当然の特権なり、又義務たらざる可からず。最高学府としては此時

代の精神に順応すべく教育の針路を取る所以なり。

世界大戦の思想に及ぼせる影響に至つては誠に偉大なるものありて、十八九世紀の際仏国の大革命が世界の人心に影響を及ぼせる如きの類に非ず。露国の崩壊が過激思想の耽溺に因せることに依つても之を知ることを得べし。而も専制政治の暴虐よりは過激思想の荼毒は国土人民に禍すること多くして露国の天地今や朦朧暗澹たり。我国が維新の当時開国進取の国是を立て常に先進国の長所を取つて我国の文化の発展に資し国運隆々長足の進歩をなし遂に世界五強の班に列せりと雖も、一般国民の教育未だ普及向上せざるを以て若し危険思想の宣伝に追随せんとする如きものあらば断乎として之を排斥し其蒙を啓かざるべからず。而して現時の所謂民衆主義に関する思想の如きは之を善導し之を良化して国民の文化を向上せしむるを要す。蓋し国家は民衆より成る、其の民衆の幸福安寧を増進するは国家の向上発展を来たす所以の道なり。国家は少数の階級にのみ因つて其の富強と文化とを贏ち得べき者に非ざるが為、軍事に在つては国民皆動員し産業に在つては国民皆就業し貧富の懸隔も少なく階級の差別も亦多からざることに於て始めて国家富強の実を挙ぐる事を得べし。然れども教育を普及して国民の智能を啓発し知識の程度に於て上智下愚の懸隔を撤するに至らざれば民衆主義は徒らに一片の理想論たるに過ぎざるべし。是に於てか国民教化の本源たるべき最高学府の使命重大なる所以なり。吾人は其の言論に於て其の学究に於て国民思想の善導上感化を及ぼすところなくして可ならん哉。今や国民の思想は一歩を誤るときは其の危機に陥ることなしとせず。即ち思想の悪化は或は社会の秩序を無視し或は人心の狂激を醸し所謂人心惟危く道心惟微なる境遇に至ることなしとせず。或は労働問題の如き或は普選問題の如き或は食糧問題の如き当面の経済社会問題に対して悪化せる思想を以て其の解決を試んとするが如きことは一利なくして万弊あり。却て国民の幸福安寧を増進するの道を阻礙して国家の前途を危うするものなり。国民思想の善導を以て自ら任ずるものは豈に又時難を済ふの抱負なくして可ならん哉

終りに臨んで尚一言せん。最高学府に於ては純理と応用とを問はず常に自由独創的研究を推奨す。学海は広く研究は深く微より細に入つて研鑽益々其の蘊奥を極むることは是れ即ち最高学府の特長なり。是を以て其の研究費の如きは多々益々之を辨じて惜むことなきを要す。然るに現時我国の五帝国大学の如き絶えず研究費欠乏の声を聞く。学術の進歩上誠に遺憾なりとす。然れども之を過去に顧るに三十年前旧札幌農学校は其経費年額僅に三万円に過ぎざる時代ありき。三十年後の今日北海道帝国大学に於ては経常臨時及医工両学部創立費を合せて約二百三十万円に及ぶ。他日幸に各分科を増設して其設備を完整し数

千の学生を収容するに至らば大正四十年即ち今より三十年後の経費は一千万円を計上することなしとせざるべし。蓋し先進の帝国大学に於ては其の爰に至るは向後十幾年を待たざるべきか、思ふて茲に至らば新進の大学たる本学の将来に対して一段の努力を須ひ、之をして我国の学界に於ては一大重鎮となり世界の学界に於ては其の先進大学と相伍して遜色なきに至ることを期せざる可らず。同僚各位と在学諸子の奮励を希望して止まず。聊か卑懐を述べて式辞に代ふ。

（『文武会々報』第九二号、一九二一年二月）

6　北海道帝国大学創基五十周年記念祝典における佐藤総長式辞

（一九二六年五月一四日）

時維レ大正十五年五月十四日本学創基五十周年記念式ヲ挙行スルニ当リ、畏クモ宣仁親王殿下ノ御差遣ヲ蒙リタルハ本学無上ノ光栄ニシテ聖恩ノ洪大ナル恐懼感激ニ堪ヘヌ所デ御座リマス。且当局大臣ヲ初メ朝野貴賓ノ臨席ヲ辱ウセルコトハ感謝ニ堪ヘマセヌ。厚ク御礼ヲ申上マス。

伏シテ惟ルニ王政維新ノ初先帝陛下万機ヲ親ラシタマフニ当リ蝦夷地開拓ノ宏謨ヲ立テサセラレ、是ニ由ツテ北海ノ宝庫ヲ開キ北門ノ鎖鑰ヲ固ウセラレ富国安民ノ基礎茲ニ確立セラレマシタ。尋デ黒田開拓次官大命ヲ奉シテ米国ニ赴キ親シク国内ノ政治ヲ視察シテ帰朝後拓地植民ノ大策ヲ樹ツルニ当リ開国ノ要諦ハ賢才ヲ挙グルニ在リトシテ明治五年以来人材教育ノ道ヲ講ジ農工ニ関スル技芸ノ練習ヤ医育ノ端緒ヲ開キマシタガ、明治九年ニ至リクラーク博士ヲ米国ヨリ招聘シテ之ニ託スルニ先ヅ農学ニ関スル高等ノ教育ヲ組織スルノ重任ヲ以テシ同年八月札幌農学校ヲ開設致シマシタ。是レ即チ本学ノ創基デアリマス。蓋シ農事教育ヲ第一トセルハ拓殖ノ中心ハ農業ノ振興ヲ以テ要務ト致ス主意カラデアリマス。偶々明治九年八月先帝陛下東北御巡幸ノコトアリ、函館ニ御駐蹕ノ折柄三条太政大臣ヲ札幌ニ御差遣ニナリ拓地殖民ノ実状ヲ視察セシメラレ、我札幌農学校ノ開校直後ニ於テ親シク之ニ臨マレ学事御奨励ノ御盛意ノアル所ヲ奉戴セルコトハ寔ニ光栄ノ至リデ札幌農学校ノ前途ハ洋々トシテ春海ノ如クデアツタコトガ思ハレマス。

明治十三年始メテ新農学士ヲ出スニ至リマシタガ翌十四年ニハ先帝陛下龍駕ヲ本道ニ枉ゲサセタマヒ親シク開拓ノ実況ヲ覧ハセラレ、且我札幌農学校ニ臨御遊バサレ農場ニ於テ農事実験ノ状況ヲモ御巡覧ニ相成リマシタコトハ寔ニ恐レ多キコトヲ当時天顔ニ咫尺シ奉リタル者ノ感泣措ク能ハザル所デアリマシタ。

教育ハ永遠ニ亘ル生命ヲ有スルモノニシテ一時ノ政策ノ波動ニ依ツテ消長ヲ来タスベキモノデ御座リマセヌ。其レ故廃使置県トナリ三県分治ノ時代ニ於テモ札幌農学校ノ教育事業ヲ継続

シテ明治十九年ニ及ンダノデアリマス。

明治十九年更ニ廃県置庁ニナリマシテ新タニ設ケラレタル北海道庁ハ所謂第二ノ開拓使ニシテ北海全道ニ於ケル拓地植民ノ事業ヲ管理スルコトトナリ、当時ノ岩村長官ハ鋭意事ニ膺リ人材教育ノ要ヲ認メテ札幌農学校ノ学制ヲ改新シ其ノ発展ヲ図ラレマシタ。然レドモ文政ノ統一ハ我国維新以来ノ国是デアリマスカラ明治二十八年文部大臣ノ直轄トナリマシタコトハ当然デアツテ、其後益々其拡張ヲ図ルコトヲ得ルニ至ツタコトハ本学ノ改革上ノ一ノ回転期デアリマシタ。

戊辰以降帝国ノ国運ハ十年ヲ一期トシテ進展致シマシテ、就中第三期第四期ヲ通シテ外ハ国威ヲ宣揚シ内ハ文治ヲ普及スルニ至ツタコトデアリマシタ。殊ニ文運ハ最モ隆々トシテ揚ツタノデアリマシテ本道ニ此際帝国大学ヲ設立スルノ要望モ起ツタノデアリマス。而シテ札幌農学校ハ明治四十年ニ於テ東北帝国大学ノ農科大学トシテ其制度ニ変更ヲ見マシタガ、之ハ創基以来其実質アツテ名カリシモノヲ顕ハシタニ過ギナカツタノデアリマシタケレドモ農科大学ヲ中心トシテ将来益々其発展ヲ図ルコトニ至ツタ訳デアリマシタ。是レ即チ政府当局ガ明治初年ニ於テ不毛未開ノ本道ニ一ノ高等教育機関ヲ設置セシハ独リ農科ニ関スルモノニ非ズシテ将来諸般ノ学術ニ渉ル専門教育ヲ施サントセル理想ヲ今ヤ実現スベキ時世ニ進ミ来ツタノデアリマス。而シテ明治四十四年ニ至リ今上陛下ガ東宮御時代ニ本学ニ台臨ヲ賜ハリ本学ハ其施設経営ヲ台覧ニ供スル光栄ヲ有シタノデアリマス。当時ヨリ三十年前明治天皇陛下ヲ御迎ヘ申上ゲタル時ヨリハ稍其面目ヲ改ムルモノガアリマシタケレドモ、本道ノ拓殖モ昔日ノ比ニ非スシテ物産ハ興リ人口ハ増シ随ツテ教育ノ振興ヲ図ルベキモノ多クナツタノデアリマス。是ニ於テ乎文政当局ノ施設ト道民ノ輿望トニ因ツテ大正七年ニ至リ北海道帝国大学ヲ創立セラルルニ至ツタコトハ帝国ノ文政史上特筆スベキコトデアルト思ヒマス。幸ニ北海道庁長官及ヒ富豪諸氏ノ後援モアリ先ツ医学部創立準備ヲ進メタノデアリマス。蓋シ本道ノ如キ植民地ニ於テハ衛生診療ヲ最モ重ンズベキ理由ガアルカラデアリマス。而シテ大正十一年ニ至リ授業ヲ開始スルニ及ビマシタガ同年摂政殿下ヲ奉迎スルコトヲ得マシタコトハ本学ニ於ケル最近ノ大ナル光栄デアリマス。而シテ大正十四年ニ至リ年来道民ガ工業振興上要望セル工学部ガ高等諸学校創立及拡張案ノ予算ニ基ヅキ其新営及ヒ組織成ツテ同年授業ヲ開始シ、今ヤ医工両学部ハ各学部長ニ依ツテ開学ノ報告ヲ為スコトニ至リマシタコトハ本学ノ光栄トスル所デアリマス。

本学ハ綜合大学トシテ現今以上ノ農医工ノ三学部ヲ其主要部ト致シテ居リマスガ、外ニ大学令ニ依ル大学予科ヲ有シ附設学科トシテ土木水産ノ両専門部アリ農学部ニハ又農学林学ノ両実

科ヲ持ツテ居リマシテ創基以来各種ノ卒業生約四千名御座リマスガ現今在学ノ学生生徒ハ総計二千百余名ニ及ンデ居リマス。

回顧致シマスルト明治ノ初年六千方里ノ本道ハ人煙極メテ稀少榛莽天ヲ蔽フノ当時ニ於テ高等学府ヲ札幌ニ設置セラレタルハ政府当局ノ一大英断ト思ヒマス。蓋シ明治維新御誓文ノ五条ノ一ニ「智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ」トノ大御心ニ副ヒ奉リ、日進月歩ノ学術ヲ応用シテ北海ノ宝庫ヲ開キ国力ヲ増進シテ皇基ヲ振作スル宏猷ニ献替スル精神ニ出デタルモノト信ズルノデアリマス。過去五十年間ニ於テ世界ノ学術ハ駸々トシテ進ンデ居リマス。思フニ学理ハ世界共通ノモノニシテ自然ノ真理ハ学者ノ手ニ依ツテ闡明スルモノデアリマスカラ、自後益我北海道帝国大学ハ学界ノ権威トシテ立チ帝国ノ文化ト世界ノ学界トニ貢献セント欲スレバ既設学部ノ外ニ尚理法文等ノ学部ヲ速カニ増設シテ最高学府ノ完成ヲ図ル所ナケレバナラヌト思ヒマス。

本日ヲトシ創基五十周年記念式ヲ挙クルニ当リ、辱クモ宮殿下ノ御前ニ於テ当局大臣及朝野貴賓ノ御参会ヲ辱ウシ、茲ニ聊カ鄙懐ヲ抒ヘテ式辞ト致スコトハ昌介ノ最モ光栄ト存スル所デ御座リマス。

北海道帝国大学総長　佐藤昌介

（『北海道帝国大学創基五十周年記念祝典報告』）

7　北海道帝国大学創基五十周年記念祝典における農学部沿革報告

（一九二六年五月一四日）

本日畏クモ宣仁親王殿下ノ御前ニ於テ北海道帝国大学創基五十周年記念式ヲ挙ケラレマスル時、茲ニ本学農学部ヲ代表シテ学部ノ沿革ヲ述ベマスコトハ無上ノ光栄トスル所デ御座リマス。

本学部ノ抑々ノ起リハ実ニ今ヲ距ル五十年前明治九年八月ニ札幌農学校ガ始メテ設ケラレタ時デアリマシテ、我国ニ於ケル高等農事教育機関ノ中最モ古イモノデアリマス。シカシテ本校ノ生レ出タ当初ハ本科ト予備科トノ二ツデアリマシタガ、其後明治二十年三月ニ工学科及ビ農芸伝習科ヲ設ケ更ニ二十二年九月ニハ兵学科三十年五月ニハ土木工学科三十二年五月ニハ森林科ヲ設ケマシタ。

其間ニ歳月ヲ経ルニ随ヒ札幌市街ハ漸ク繁栄ヲ加ヘ当時繁華ノ中心ニ近カツタ校舎敷地ハ種々ノ点カラ不適当トナツテ参リマシタノデ、新タニ敷地ヲ附属農場ノ内ニ選定シ明治三十二年六月校舎ノ改築ヲ始メ三十六年七月ニ竣工移転致シマシタ。是レガ即チ現在ノ農学部講堂ノ根本デアリマス。明治四十年六月ニ東北帝国大学ガ仙台ニ設ケラレタ際札幌農学校ハ其ノ農科大

学トナツテ大学ノ名ヲ冠スルニ至リマシタガ、其内ニハ農学科農芸化学科林学科畜産学科ヲ置キ且ツ大学予科農学実科林学実科土木工学科水産学科ヲ附属セシメ同年九月盛大ナル農科大学開学式ヲ挙行致シマシタ。

大正二年六月本学学則ヲ改正シテ農学科ニ第一部第二部第三部又畜産学科ニ第一部第二部ヲ置キ、且ツ全体ノ学科目並ニ授業時数ヲ改メ学生ニ対シ学科目選択ノ自由ヲ与ヘ自発的研究ノ精神ヲ鼓吹スルノ方針ヲ採ルニ至リマシタ。是レ実ニ本学学制上ノ一大改革ト申サネバナリマセヌ。

尋イデ大正七年三月新タニ北海道帝国大学ガ当地ニ設ケラレルニ当リ、東北帝国大学農科大学ハ同年四月ヨリ其農科大学トナリ、大学予科及ビ土木工学科水産学科ハ農科大学カラ分離シテ大学ニ直属スルニ至リマシタ。大正八年四月農科大学ヲ農学部ト改称シ、更ニ同年九月農学部学則ヲ全部改正シテ農学科第一部ヲ農学科ニ同第二部ヲ農業経済学科ニ同第三部ヲ農業生物学科ニ改メ同時ニ学生ノ修業上ニ於ケル自由ノ範囲ヲ一層拡大スルニ至ツタノデ御座リマス。

右述ベマシタ如ク我ガ農学部ハ其前身札幌農学校創立以来組織ノ上ニ少カラヌ変化ヲ受ケマシタガ、過去五十年ノ間本邦農学界ノ一権威トシテ重キヲナシ、幾多貴重ナル研究ヲ発表シ且ツ又有為ノ卒業生ヲ出シ国家社会ニ貢献セル所鮮ナカラヌコト ト思ヒマス。今日迄農学部関係ノ出身者ハ農学士一千二百六十七人林学士百三十六人工学士十六人其他諸学科卒業生一千九百八十八人総計三千四百人ヲ超エテ居リマス。

終リニ臨ミコノ光輝アル歴史ヲ有スル本学部ハ将来一層内容ヲ整ヘ、他ノ諸学部ト互ニ手ヲ携ヘテ益々本学発展ノ為メニ努力シ惹イテ国家文運ノ隆昌ニ貢献センコトヲ冀望シ、一言ヲ陳ベテ報告ト致シマス。

大正十五年五月十四日

北海道帝国大学農学部長　南鷹次郎

（『北海道帝国大学創基五十周年記念祝典報告』）

8　北海道帝国大学創基五十周年記念祝典における医学部開学報告

（一九二六年五月一四日）

曩ニ本学医学部授業ヲ開始シ附属医院モ亦一部成ヲ告ゲ将ニ開学ノ式典ヲ挙行セントスルニ当リマシテ、大正十二年九月帝都不測ノ黄災ニ際会シ終ニ開学式ヲ無期ニ延期スルノ止ムナキニ至リ以テ今日ニ及ンダノデアリマス。本道ニ於ケル医学教育機関設置ノコトハ本道人士ノ久シク熱望スル所デアリマシタガ、大正八年二月六日勅令第十三号ヲ以テ本学ニ医学部設置ノ

コトガ公布セラレ多年ノ希望茲ニ実現ヲ見ルニ至ツタノデアリマス。是レヨリ先大正七年文部省ハ創立委員トシテ東京帝国大学教授中ヨリ青山胤通隈川宗雄佐藤三吉小金井良精永井潜長与又郎諸氏札幌市立病院ヨリ石原弘秦勉造両氏ヲ嘱託シテ着々校舎ノ設計ト造営トヲ進メタノデアリマスガ、大正十年四月ニ至リ医学部附属医院設置セラレ同月内科学外科学解剖学生理学医化学病理学講座ノ新設ヲ見、五月二十七日初メテ教授ノ任命アリ教授秦勉造氏学部長ニ有馬英二氏附属医院長ニ補セラレ医院本館ノ落成ト共ニ十月ニ至リ先ヅ患者ノ診療ヲ開始シ翌十一年四月初メテ学生六十七名ヲ収容シテ授業ヲ始ムルノ運ニ至ツタノデアリマス。爾来星霜ヲ閲スルコト正ニ四年建築施設漸次其ノ歩ヲ進メ講座モ亦随時増設セラレテ本年三月已ニ第一回卒業生六十余名ヲ出スニ至ツタノデアリマス。

現在本学医学部講座総数二十五教授十八名助教授講師ヲ併セテ二十三名学生総数二百八十四名ニ及ンデ居リマス。建設ノ事業基礎医学ニ於テ略ホ完了シ附属医院ニ於テハ病棟已ニ竣工セルモノ七棟入院患者現在病床総数五百近キ将来ニ於テ建築セラルベキ病棟五ヲ以テ一先完了ヲ告グル予定デアリマス。

大正十四年度ニ於ケル入院患者延人員十一万一千四百九十三名外来患者数八万八千四百二十二名之レヲ前年ニ比シテ漸次増加ノ傾向ヲ示シテ居ルノデアリマス。本学部創立日尚ホ浅ク内外共ニ将来ニ充実スベキモノ多々アルノデアリマスガ、本学創基五十年ノ祝賀ヲ挙行スルニ当リ医学部設置ノ沿革ト現況トヲ報告シテ開学ノ辞ト致シマス。

大正十五年五月十四日

北海道帝国大学医学部長　今　裕

（『北海道帝国大学創基五十周年記念祝典報告』）

9　北海道帝国大学創基五十周年記念祝典における工学部開学報告

（一九二六年五月一四日）

北海道帝国大学工学部ハ大正十三年九月勅令第二百二十四号ヲ以テ開設セラレ翌十四年四月第一期学生ヲ収容シテ授業ヲ開始致シタノデアリマス。是ヨリ先キ大正七年政府高等諸学校拡張ノ議決スルヤ本学部ノ創立モ亦其ノ内ニ含マレテ居リマシタノデ、本学ハ其ノ準備トシテ大正八年先以テ予科ノ拡張ニ着手致シタノデアリマス。同十年文部省ハ故工学博士寺野精一故工学博士柴田畦作工学博士鳳秀太郎工学博士加藤正雄工学博士舟橋了助諸氏ヲ挙ケテ創立委員トシ、学部組織ノ一般方針ニ関スル審議協定及教官候補者ノ選択ニ当ラシメタノデアリマス。不肖又後ニ至リテ其ノ席末ニ列シ議ニ参加スルコトナリマシ

タ。翌十一年本学予科ハ工学部ニ進入スベキ最初ノ生徒ヲ収容シ、一方文部省ハ学部建築ノ工ヲ董シ着々其ノ歩ヲ進メ、予定ノ如ク昨年ヲ以テ第一期ノ進入生ヲ収容スルニ支障ナキヲ得セシメタノデアリマス。而テ現在ニ於テハ本年収容セル第二期生ト共ニ合計百八十五名ノ就学者ヲ見ルニ至リマシタ。

講座ノ数ハ大正十三年度ニ於テ六講座十四年度ニ於テ十三講座ノ設置ヲ見マシタガ、更ニ本年度ニ於テハ近々六講座増設ノ発表ヲ見ル運ニナツテ居リマシテ之ヲ以テ予定ノ二十五講座ハ完備サルルノデアリマス。講座ノ種類ハ主トシテ土木鉱山機械電気ノ四学科及之ニ伴フ基礎学科ニ関スルモノデアリマシテ、本道拓殖上密接ノ関係ヲ有スル者ガ先以テ設置セラレマシタコトハ申スマデモアリマセン。設備費総額ハ九十七万五千円デアリマス其ノ内七万五千円ハ予科ノ拡張ニ又十万円ハ学部ノ建築費ニ流用致シマシタノデ、学部ニ対スル純設備費ハ八十万円デアリマス。之ヲ以テ二十五講座ニ授業設備ト同時ニ研究機関ノ完備ヲ計ルコトハ到底期待出来マセンガ、国家ノ財政上止ムヲ得ヌ所デアリマシタ。其ノ不足ニ対シテハ今後逐次補充ニ努ムルコトニ致度イト思ヒマス。

授業ハ時勢ノ進運ニ鑑ミ科目制度ヲ採用シ学生ヲシテ其ノ好ム所ニ従ヒ自由ニ選択履習スルコトヲ得セシムルノ方針デアリマス。唯実験実習ニ至リテハ器具機械ノ設備ニ制限アルヲ以テ無数ノ志望者ヲ収容スルコトガ出来兼ネマス故ニ、四学科ニ分チ各学科ニ定員ヲ定メ定員内ノ学生ハ支障ナク履習セシムルト同時ニ定員外ノ学生ニモ成ルベク其ノ希望ニ応ジテ履習ノ機会ヲ与フルコトヲ期シテ居リマス。

惟フニ輓近国家ノ急務ハ産業ノ振興ニ如クナキハ万人ノ認ムル所トナリマシタ。而モ原料資本ニ於テ必シモ豊富ナリト云フコト能ハザル我邦ニ於テハ之ヲ補フニ優秀ナル技術ヲ以テセネバナリマセン。我国ハ此点ニ於テモ先進諸国ニ比シテ未ダ遙カニ遜色アルハ遺憾ナガラ事実デアリマス。乍去之ヲ過去五十年ノ進歩ノ迹ニ徴スレバ早晩彼等ニ比肩シ得ベキ時代ノ来ルコトハ疑ナキノミナラズ、吾人ハ技術ニ於テハ寧ロ独特ノ長所ヲ有スルヲ以テ今後不断ノ切磋琢磨ニ依リ其ノ技能ヲ助長スレバ、必ズヤ優越ナル地歩ヲ占ムルニ至ルコトハ期シテ俟ツコトヲ得ルト信ジマス。

本学部ノ増設モ人材ノ養成モ其ノ目的蓋シ爰ニ在ルコトヲ考ヘマスト、吾人前途ノ使命ノ重且大ナルヲ痛切ニ感スルモノデアリマスガ願クハ一同協力シテ以上ノ目的ニ邁進シテ国家ノ要望ニ副ハンコトヲ期スルノデアリマス。

大正十五年五月十四日

北海道帝国大学工学部長　吉町太郎一

（『北海道帝国大学創基五十周年祝典報告』）

10 『北海道帝国大学新聞』発刊の辞（佐藤総長）

（一九二六年五月一四日）

北海道帝国大学新聞本日を以て生る。学内に於ける言論上の一機関を得たるを喜ぶ。然れども其使命は重大なるものあることを自覚せられんことを望む。

想ふに本学の組織は複雑にして大学各学部の外に予科及各専門部を包含するが為、其の間の聯絡統一が必要であることは申迄もない。新に生れたる大学新聞が茲に留意する所あつて各学部各科の真相を報道して其の事実の誤聞誤報等を免れしむることは、即ち団体的精神の向上に対して貢献する所大なるものあるべきことは疑を容れざる所である。

東西両帝国大学は各大学新聞を発刊して其の学友会の機関新聞となせること茲に年あり。其の記事能く大学の内容を報道して他の理解に便益を与へて居る。又時には諸先生の論説講演を掲げて後進を裨益することも尠くないことと思ふ。吾大学新聞も学内に於ける諸般の記事斗りでなく、各方面に亘る研究や業績の報道を詳報することとなつたならば、其の裨益する所蓋し学内斗りでないことと思ふ。

然りと雖も大学新聞の本来の性質は決して時事に対して縦談横議するものでない。全く之に超越して学界に於ける其の本領を失はずして研究上後進者を裨益することを目的として立つことに於て、大学新聞の価値が発揮せらるることであると思ふ。又世上の新聞雑誌等に於て往々事実の誤報あつても其の正誤は何等の注意をも惹くことのないは常であるが、斯の如き場合に於ては世人が大学新聞を信頼して其の記載する事項は事実であることを認めしむるに至らば、大学新聞が重要なる使命の一を果たせるものといつて可なるものである。

凡そ雄大なる健筆を揮ふことを主眼とせないで、謹直にして真率なる態度を以て編纂に従事せらるることを、担任者諸君に望んで止まざる所である。一言希望を述べて発刊の辞とする。

（『北海道帝国大学新聞』一九二六年五月一四日）

11 入学宣誓式における南総長訓示

（一九三三年四月二六日）

本学が今回学部導入の多数有為の秀才を迎へて宣誓式を挙行するを得ますることは、誠に慶賀の至りでありまして衷心から喜びに堪へない次第であります。

本年収容する全学生数は二百九十九名外に選科生四名であり

ます。諸君は本日を以て宣誓名簿に自署し愈よ本学に入籍さる訳でありますが、本学に取つても亦入学者諸君に取つても誠に記念すべき日であると申さなければならぬのであります。申す迄もなく此の宣誓は決して形式的に行ふものではなく誠心誠意を以て各自の決心を記録するものでありまして、諸君は本日此署名の瞬間に於ける心象を永く銘記し爾後時々反省を加え刺戟と緊張とを以て終始一貫その本分を尽されたいのであります。

諸君が入学の当初に於て知らねばならぬことは学部長或は教官から夫々御話があることと存じますが、私はこの機会に於て私の心附いた二、三を御話して学修上の参考に資したいと思ふのであります。

さて大学の使命は何であるかと申しますとそれは大学令の第一条に

「大学は国家に須要なる学術の理論及応用を教授し並其の蘊奥を攻究するを以て目的とし兼て人格の陶冶及国家思想の涵養に留意すべきものとす」

とあります。即ち大学は国家に須要なる学術上の教授の場所であり又研究の場所でもあるのでありまして、過去に於て闡明せられた既知の真理を学修し未知の真理に向つてその開拓の歩を進めて行くに在るのであります。

惟ふに学術の研究は国運進展の重大要素でありまして、産業振興の基礎であり人類福祉の源泉であります。現時の如き財界不況産業不振の時に当つて永遠に之を救ひ産業を振興し国力を増進するには如何しても学術の研究に待たなければならないのであります。輓近の学術は次第に発達して専門の内に専門を生じ微に入り細を穿ち尚且不足を感じつつあるの観あるは学界進歩の証左であつて慶賀すべきことではあるが、余り細目に亘るの結果只一局部を見て全局に暗く自家の専門学科と他学科との関係を忘却し却て創意の力を弱むる弊なきを保し難いのでありますから、一面自己研鑽の学術に邁進すると共に他面に於ては全局を見るの明を養ふことが最必要なこととなつて来るのであります。

又それと同時に高潔な人格を磨いて一世の師表となるの覚悟がなければならぬのであります。人は如何に学術技芸を秀づるともその人格に於て欠くる所あらんか其の有する智識技能は却つて身を傷け世を毒くの結果に立ち至るのであります。人格の基礎は誠実であり責任観念であり道徳観念であります。真に世の尊敬すべき人物たらんが為に高潔なる人格を必要とするのは古今東西皆其の軌を一にして居ります。諸君は思を茲に致して常に修養に留意せられんことを望む次第であります。

又国家思想の涵養を計つて国民精神指導の中心勢力となると

云ふことも、諸君が心掛けねばならない重要な務となつて居るのであります。今日世相の悪化に伴ひ詭怪矯激な思想を醸成し、青年子弟を駆つて之が渦中に投じ時に学園の平和をも破壊せんとするものあるは洵に憂慮に堪へない所であります。思想の正常を保つことは独り在学中に限つたことではないのでありまして、卒業後就職の場合にも影響する所が非常に多いのであります。その官衙たると学校たると会社たるとを問はず、何れも思想傾向を慎重審議して採否を決する現状であります。諸君は能く此の点を戒心し不健全なる思想に溺惑して将来一身の前途を誤ることなき様特に注意を喚起して置きたいのであります。

我国の大学教育は所謂登龍門の枢要な地位を占め来つた歴史を持つて居るのであります。以前は大学の卒業生はその卒業と同時に一躍社会の上位に椅子を占め得たのでありますが、現在の様に多数の官公私大学或は高等専門学校とがあつて年々あり余る卒業生を社会に送り出して居りますが然し採用には限りがあり、殊に経済的社会不振からその採用率が減じた様な状態であります。でありますから諸君は在学中に専心学事に親しみ学窓生活の期間を最有意義に善用して実力を備へて実社会の活動に適応する素養を作ると云ふことが先決問題となる訳であります。人は能く元旦に於て一年の計を立てるが、諸君は本日本学入学の劈頭に於て卒業後の方針を考へて置かなければならない。三年或は四年の大学生活は実に諸君の学生生活の最後であつて今迄と異る特殊の意義が存在するものであると云ふことを銘記して頂きたいのであります。それには如何しても健康に注意して貰はなければならぬのであります。如何に学業成績が優秀であつても身体が羸弱であつたならば大志を達成することは不可能であります。毎年本学に於ても相当数の病気休学、退学、死亡者を出して居りますが之は啻に当人の遺憾であるばかりでなく国家の甚しい損失であります。諸君は十分の注意を以て酒色を遠ざけ不節制を謹み大に心身を鍛練して健康の増進に精進せられたいのであります。

尚茲に附け加へて申上げて置きたいのは軍事教練に関してであります。本学の軍事教練は担当教官の熱心なる指導に依つて従来とも優良なる成績を挙げ来つたのであります。諸君が配属将校の方々から軍事教育を受けられるのは即ち心身を鍛練してその資質を向上し一般軍事上の訓練を受けて将来国家の中堅となるのでありまして国家の重要なる要求の一となつて居るのであります。殊に最近満州国が卒業生の採用申込に際し「軍事教練修了」と云ふことを採用上の必須条件として重要視して居ることは最注目を要する所でありまして諸君の御一考を煩すと共に一層の精励を希望する次第であります。

今や我国は未曾有の国難に直面し国民の一大覚醒を要するの秋であります。客月二十七日には国際聯盟を脱退し畏くも陛下には詔書を渙発せられまして国民の進むべき道その執るべき方針を明示せられたのであります。申す迄もなく脱退後の世界の視線は等しく我帝国に集中せられ、その一挙一動に非常なる注意が払はれて居りまして若しこの際一歩を誤らば不測の禍を生ぜんとする極めて重大な時局に遭遇して居るのであります。身苟も最高学府に在るものは能く時局の真相を明かにし、透徹せる理解と断乎たる決心を以て尽忠報国の精神を養ひ各その本分に精励して皇威を宣揚し国運の進展に貢献しなければならぬと考へるのであります。

簡単ながら之を以て訓辞に代へる次第であります。

昭和八年四月二十六日

総長　南鷹次郎

（『北海道帝国大学新聞』一九三三年五月二日）

12　北海道帝国大学創立第十六回記念式における高岡総長式辞

（一九三四年二月六日）

本日本大学第十六回記念式を挙行するに当り、聊か所感の一端を述べますことは私の光栄とする所であります。

旧臘十二月二十三日畏くも皇太子殿下御降誕遊ばされ、世界に比類なき万世一系の我が皇室は益々御繁栄に亘らせられ、我が帝国の基礎弥々鞏固となりましたことは、九千万国民の共に共に欣喜雀躍措く能はざる所でありまして、万邦無比の我が国体は今更乍ら我々臣民の大に誇りとする所であります。

又昨年五月には閑院宮春仁王殿下同妃殿下、六月には李王垠殿下本大学に御台臨あらせられ親しく本大学の実情を御視察遊ばされましたことは、本大学の非常に光栄とする所であります。

翻つて昨昭和八年に於ける国際間の情勢を達観致しまするに、昨年三月二十七日渙発せられました詔書の一節に、「方今列国ハ稀有ノ世変ニ際会シ帝国亦非常ノ時艱ニ遭遇ス是レ正ニ挙国振張ノ秋ナリ」といふ御言葉を下し賜りました通り、世界列国は依然として何れも皆非常時なる暗雲に鎖され、未だ多くの光明を見出すことの出来なかつたことは真に遺憾の至りでありました。抑々現今世界列国が斯の如く非常の秋に際会して居りますのは決して一朝一夕に来つたものではありません。世界の文化が年と共に進展し来つて殆ど其の極度に達せんとしつつありました際に、突然世界戦争なる一大事件が勃発し、数百万の生霊と数百億の巨財とを蕩尽して世界の文化を破壊致しました結果に外ならないのであります。戦乱は四年有半の長き間継

続致しました為、戦勝国と言はず戦敗国とを論ぜず何れも皆疲労し切つて了ひましたので、戦争直後に於ては列国は何れも皆協調主義に依つて平和の克復の為に全力を尽したものであります。其の大なる現はれの一は申す迄もなく国際聯盟の成立でありました。然るに其後幾多の年月を経過し戦争の傷痍漸く薄らぐに従ひまして嘗ての戦勝国は勿論のこと、戦敗国も亦共に共に自国の勢力を恢復し、更に進んで之を振張せんことを企画し、漸次協調主義を捨てて自国本位の政策を実行するに至りました。現今五大強国を中心として政治的及経済的ブロックを形成し、互に他を排除して自国の利益のみを増進せしめんとする傾向あるが如きは其の一現象であります。されば昨年開かれました国際経済会議と云ひ、軍備縮少会議と申せ、何れも皆殆ど失敗に帰しました如きも決して事偶然ではありませぬ。斯くて列国間の政治的及経済的関係は今や極めて微妙なる動きを示し真に「稀有ノ世変ニ際会」して居る有様であります。

列国間の情勢にして既に斯の如きであります以上、其の間に国を成す我が帝国の地位も同様なる状態と成りました事はまた当然であります。一昨年我が国が満洲国の独立を承認するや、列国の反対を受け、遂に十有三年の長き間列国と協調を保ち来つた国際聯盟を離脱して、外交上孤立の立場に立つの止むなきに至つたのであります。而して之を外に見るに、西には二十年間常に内乱の絶えざる隣邦あり、北には思想上政治上及経済上の主義に於て全然我が国と相容れざる邦家あり、東太平洋の波も亦必ずしも太平なりと言ひ得ない有様であります。内に在ては思想界の動揺未だ収まらず、農村の疲弊は其極度に達し、僅に軍需品工業及時局匡救事業等に依りまして微かなる光明を財界の一端に認め得るが如くでありますが、前途未だ決して楽観を許さないのであります。而して国家の財政の如き、公債政策に依り年々多額の公債を発行して辛うじて収支の均衡を保ちつつある有様でありまして、真に「帝国亦非常ノ時艱ニ遭遇」して居るのであります。斯の如き内外の情勢に応ずる為、我が国家の財政は専ら満洲事件費及軍事費に重きを置き、他の文化事業の如き多く之を顧るの余裕なき有様であります。我が帝国の情勢斯の如きでありますから、国家の一機関たる我が北海道帝国大学の如きも亦非常時の影響を痛切に被むりつつあるのであります。斯の如く現時非常時局の依つて来る所を考えますると世界の非常時が打破せられざれば我が国の非常時は打破せられず、我が国の非常時が打破せられざれば我が大学の非常時も亦打破し難しと言はなければならないのであります。併しながら我が国民は一度艱難に遭遇しますれば勇気常に百倍し、如何なる艱難も之を打破せざれば已まざる特性を有することは、我が歴史の明らかに証明する所であります。我が国の前途は今日楽

観を許しませぬが、又決して悲観すべきものではありません。今我が大学の如きも非常の秋に際会して居りますけれども、宜しく之に善処して、最高学府たる大学の使命を辱しめざる様努めなければならないのでありまして、之は吾人の負ふ重大なる責務であります。

然らば大学の使命とは何でありませうか。大学の使命には種々ありますが、之を大別すれば三つとなすことが出来ます。即ち一は国家社会の為に有為なる人材を養成すること、二は学術の蘊奥を攻究すること、三は一般社会の文化の発展の為に直接寄与すること、是であります。此の三大使命の内其の何れに最も重きを置くべきであるかは議論の在る所でありまして、又各国に於ける大学教育に夫々特色の存する所であります。之を達観しますれば、英吉利の大学は寧ろ第一の使命に重きを置くものの如く、独逸の大学は第二の使命を果す点に於て他の国に一頭地を抽んじて居ります、而して第三の使命に特に注意を払ふ点におきましては北米合衆国の大学の右に出づるものはありますまい。我国の大学は、先程委員長の朗読したる大学令第一条に明かに示してあります様に、「国家ニ須要ナル学術ノ理論及応用ヲ教授シ並其ノ蘊奥ヲ攻究スルヲ以テ目的トシ兼テ人格ノ陶冶及国家思想ノ涵養」に努むる使命を有して居るのであります。何人にとつても人格の陶冶の必要なことは言を俟たないのでありますが、大学に遊ぶものは他日業成りて社会に出づるや、多数民衆の指導者となり其の軌範たるべき責務を有するものであるますから、特に人格の陶冶に留意し高傑なる士たることに努めなければならないのであります。之は主として学生各自の修養に俟つべきは申すまでもありませぬ。同時に又学生を指導するものの一挙手一投足は直に其の反映を学生の人格修養の上に及ぼすものであることを思ひますならば、私共教育の任に当るものの責任の重且大なるを痛感せざるを得ないのであります。

而して現代の社会には、個人と人類との間に之が連鎖機関として国家及国民なるものが存在して居ります。社会の発展上此の機関が重要であり且必要欠く可からざるものであります以上吾人は吾人の所属する国家の隆盛を計り、国民の福祉を増進せしむる様努力しますのは国民の負ふ重大なる責務であります。殊に高等教育を受くるものに於て尚更然りとします。されば大学に於ける教授の自由の如き充分に之を尊重しなければならないことは勿論のことでありますが、苟くも国家の成立に害を及ぼす学術の教授をなすが如きは厳に之を慎しむべきは申すまでもありません。是れ大学令に「国家ニ須要ナル学術」云々と特に明記せる所以であります。

人格の陶冶、学術の教授は大学の使命中最も重要なるもので

ありますが、此の使命は独り大学のみ有する使命ではありません。苟くも高等教育を授くる機関は何れも皆同様なる使命を有して居ります。併しながら大学が他の高等教育機関と異り、真に最高学府たる所以のものは、「国家ニ須要ナル学術ノ蘊奥」を究むることであります。常に世界の学界を対手として、倦まず弛まず日進月歩の研究の道に邁進致しまして、今上陛下朝見の儀の日賜りました勅語の内に宣まえる、「模擬ヲ戒メ創造ヲ勗メ」の御精神を奉戴して学術の蘊奥を究め、之に依つて内は学生指導の任に当り外は一般社会を裨益することは、是れ大学の大学たる所以であります。若し大学にして此の使命を果さざるときは、大学は只大学の名称あるのみにして実質の之に伴はざるものであると言はざるを得ないのであります。

学術の蘊奥を究めんとするには、研究の自由を認めなければなりません。研究の自由は教授の自由と共に大学の生命であります。此等の自由が充分に尊重せられて始めて大学は其の重大なる使命を完うし得るのであります。研究の自由は飽くまで之を主張し飽くまで之を擁護しなければなりません。併しながら研究の自由も「国家ニ須要ナル学術」の研究をなす為の自由であります。決して国家を破壊し国体を毀損するが如き研究をも自由になし得るの意に非ざることは言を俟たないのであります。

斯の如く、大学は学生を教育し学術の蘊奥を究むるを以て其の重大なる使命となすのでありますが、更に進んで研鑽の結果を提げて時に象牙の塔を出で、広く一般社会の福祉を増進せしむる為に力を尽すのも亦大学の有する使命の一であると信じます。之を大学の立場からのみ考へましても、大学は学理の研究をなす機関ではありますが、其の研究は自づから周囲の環境に依りて支配せられ地方色を帯ぶるものであります。斯る研究の結果を実際に適用せしめますならば、自づから地方文化の建設を促すこととなるのであります。発達したる地方文化は相集つて国家全体の文化の建設となり、一国文化の発展は延いて一般人類の文化の発展となります。是れ欧米諸国の大学が常に其の所在地方の文化の中心機関となり之が発展を促す為に努力しつつある所以であります。我が北海道帝国大学は北海道と共に生れ北海道と共に育つて今日に至つたものでありまして、両者互に離るることの出来ない親密なる関係に在るのであります。我が国の勢力が漸次北進しつつある今日、北方文化の中心となり地方文化の発展に力を尽すのも亦我が大学の帯ぶる特殊の使命であると信じます。

我が北海道帝国大学は大学としての存在は未だ日浅いのでありますが、本学の前身たる札幌農学校の創設せられて以来既に五十有八年を経過致しました。其の間先輩各位の剴切なる施設

と熱心周到なる経営とに依りまして今日の隆盛を見るに至つたのであります。此の時不肖旧臘図らずも南前総長の後を襲ふこととなりました。素より微力果して先輩各位の功績を汚すことなきや憂慮に堪へざる次第でありますが、内には同僚各位並に学生々徒諸君の奮闘と鞭撻とに依り、外には一般社会の理解と援助とに依りまして、只誠心誠意大学の使命遂行に向つて全力を注がんことを期するものであります。

同僚各位並に学生々徒諸君はそれぞれ専攻の学を異にし其の方途一様ならず、又其の立場に於ても自づから相異るものありますが、大学の使命を果すべき責務に至つては何れも皆同一であります。本大学に在るものは宛かも一家族の如く互に相親和し、相倚り相助けて大学の使命を達成する為に一致協力せられ、以て本大学をして真に北斗の光たらしめんことを衷心より冀望して止まないのであります。斯くしてこそ上は優渥なる皇室の御意に答へ奉り、下は国民の痛切なる期待に副ふ所以であると信ずるのであります。

以上所懐の一端を述べて式辞と致します。

昭和九年二月六日

北海道帝国大学総長　高岡熊雄

（『高岡総長式辞集』）

13　天皇陛下臨幸にあたって高岡総長の奏上書

（一九三六年一〇月八日）

謹ミテ本学ノ状況ヲ言上仕リマス。畏クモ天皇陛下ニハ此度陸軍特別大演習ヲ親シク御統監遊バサレ給フニ方リマシテ、本学ニ大本営及行在所ヲ置カセラレマシタコトハ寔ニ無上ノ光栄デ御座イマス。特ニ本日ハ本学ニ御臨幸ヲ仰キ誠ニ恐懼感激ノ至リニ堪ヘマセヌ。

恭シク惟ミマスルニ天皇陛下ニハ摂政宮殿下ニオハシマシタ御砌大正十一年本学ニ御台臨アラセラレ、大正天皇ニハ皇太子殿下ノ御時明治四十四年行啓ヲ仰ギ奉リ、明治天皇ニハ遠ク明治十四年ニ御臨幸ヲ賜ハリマシタ。尚大正十五年本学創基五十周年記念式典ニ際シマシテハ高松宮宣仁親王殿下ノ御差遣ヲ辱ウ致シマシタ。重ネ重ネノ御恩沢ニ浴シ真ニ有難キ極ミニ存ジ奉リマス。

抑本学ノ淵源タル札幌農学校ハ今ヲ去ルコト六十年前、即チ明治九年ニ創立セラレマシタノデ御座リマス。時恰モ国事多端ノ折デハ御座イマシタガ、北海道開発ニ必要ナル拓殖ノ研究ト人材ノ養成トヲ急務トシテ、人口僅カ二千五百ニ過ギザル此ノ札幌ニ大学程度ノ学校ガ設置サレタノデ御座イマス。当初ハ本

科予備科ノ両部門カラ成ツテ居リマシテ、教官七名学生及生徒五十名デ御座リマシタ。コノ札幌農学校ハ其ノ後幾多ノ変遷ヲ経マシテ明治四十年ニハ東北帝国大学農科大学トナリ、大正七年ニ至リ独立シテ北海道帝国大学トナツタノデ御座リマス。次デ翌大正八年ニハ医学部、同十三年ニハ工学部ガソレゾレ設ケラレ、越エテ昭和五年ニハ理学部ガ増設サレタノデ御座リマス。只今デハ農医工理ノ四学部及ビ大学予科其ノ他附属ノ三学科ヲ含ミマシテ、教官二百七十余名学生及生徒二千二百有余名ニ達シ、今日迄卒業生ヲ出スコト実ニ七千八百名ヲ超エテキルヤウナ有様デ御座リマス。

理学部増設ノ後偶々農学部改築ノ機運ニ際会致シマシテ、昨春其ノ一部ガ出来上リ更ニ第二期工事ガ竣成致シマシタ。之ガ只今大本営及行在所タルノ光栄ヲ荷フ所ノ講堂デ御座リマス。昨年ハ又常時低温研究室ヤ医学部附属医院登別分院等ガ竣工致シマシタ。更ニ今春来農学部附属植物園ニハ高山植物園ヲ築造中デ御座リマス。室蘭市ニ於ケル海藻研究所ノ新築事業モ段々進行致シテ居リマス。斯ノ如キハ孰レモ皆北方ニ地ヲ占メル本学ノ特殊ノ使命ヲ果サンガ為メデ御座リマス。カク致シマシテ自然科学ノ諸分科ハ着々内容ノ充実ニ赴イテ居リマスノデ、更ニ精神科学ノ諸分科ノ設置ヲ見マスレバ綜合大学トシテノ体制ヲ整ヘルコトニナルノデ御座リマス。又本学ニ学ブ学生生徒ハ雄大ナル本道自然ノ風物ノ感化モ御座リマシテ、自ラ質実剛健明朗豁達ノ気風ニ富ンデ居リマス。

斯ヤウニ本学ガ歳ヲ重ネ日ヲ逐ウテ充実発展致シテ居リマスノハ、偏ニ陛下ノ御宏謨御稜威ニ由リ奉ルモノト、臣等深ク感激措ク能ハザルトコロデ御座リマス。

臣等本学ニ職ヲ奉ズル者ハ大学本来ノ使命ニ鑑ミ、学生生徒ノ指導訓育ニ最善ノ力ヲ致シマスルト共ニ、益々学術ノ研鑽ニ孜メ特ニ北地ニ於ケル資源ノ開発ト文化ノ伸展トニ意ヲ用ヒ、以テ国家ノ隆盛ニ寄与シ延イテ世界ノ進運ニ貢献シ、辱ナキ奨学ノ御思召ニ聊カタリトモ応ヘ奉ルコトヲ日夜念願シテ已マヌ所デ御座リマス。

昭和十一年十月八日

北海道帝国大学総長　高岡熊雄

（『北海道帝国大学新聞』一九三六年一〇月二〇日）

14　勤労報国隊帰学報告式における今総長訓辞

（一九三九年九月）

本日茲に興亜勤労報国隊帰学報告式挙行せらるるに当り、一言所懐を述べますことは私の最も欣幸とする所であります。先づ最初に今回の壮挙に際し、率先これに参加し全学の名誉を双肩

に担ひ大陸に渡られ、無事帰還せられたる十名の指導教官各位及九十五名の学生生徒諸君に対し、深甚なる謝意と満腔の敬意を表するものであります。今回の事業は御承知の如く速急の間に取運ばれましたるため計画そのものにも相当の無理があつたのでありまして、各位におかれても幾多困難があつた事と推察致すのでありますが、今日斯く全員無事一堂に会する事を得ましたのは一に諸君の自重の賜と深く敬意を表する次第であります。今回の事業は申す迄もなく大陸の認識を深めると共に第一線将士の労苦を体感し、以て真に興亜聖業の指導者たるの意気と抱負を養成するにあつたのでありまして、諸子におかれてもこの点に鑑み凡ゆる苦難に堪へ十二分に所期の目的を達成せられました事は洵に御同慶に堪へない所であります。古来国家民族の興亡はかかつてその国の青年の意気如何にあることは歴史に明かな所でありまして、近くは明治維新の大業も多くは諸君の如き青年の手によつて成就されたのであります。今日国家が歴史的大飛躍をなさんとする秋、青年諸君に大なる期待を有する事は亦当然といはねばならぬのであります。然してこの歴史的大事業達成に必要欠くべからざるものは烈々燃ゆるが如き愛国の至誠と総ゆる困苦欠乏に堪へ得る不撓不屈の精神であります。従来の学校教育を回顧致しまするに、知識を授けるといふ点におきましては相当の効果を挙げ得たのでありまするが、一面陶冶鍛錬といふ方面におきましては遺憾の点が多々あつたのであります。文部省におきましてもこの点に鑑み近時学生生徒の鍛錬といふ事に重きを置き、団体的訓練を通じ国民的精神の練成に邁進致して居るのであります。今回の勤労報国隊も全くこの趣旨より出たものでありまして、数千の大学、高等専門学校の学生生徒を第一線に送り具に将兵の労苦を体得せしめるといふ事は、単に教育界のみならず国家的の一大壮挙と申して差支へないのであります。意気と希望に燃ゆる青年学徒が一身を君国に捧げ凡ゆる困苦と闘ひつつある第一線将士と兵火の間に相見えるといふ事は、後世青史にも伝ふべき事件でありまして伝へ聞く私でさへ思はず武者振ひを禁じ得ないのであります。現地に於て親しく体験された諸君の感激は今尚新たなものがある事と信ずるのであります。唯単に諸君が無限の教訓を得られたのみならず、遠く家郷を離れて大陸に奮戦致して居ります将士の喜びはさこそと推察するのであります。かくてこそ真の意味に於て前線銃後が一体となり得るのであります。然して諸君自身が今後有意義に活用せられ興亜の大業に邁進せられる事は勿論でありますが、単に諸君個人のみに止らしむる事なく全学の学生生徒諸君に普く伝へ相率ゐて国運の隆昌に寄与して頂きたいのであります。諸君既に御承知の如く欧洲の天地は硝煙に掩はれ、第二次世界大戦は益々大規模に展開されんとしてゐるの

であります。然して国際状勢は愈よ複雑怪奇を極めつつあるのであります。この間に処して吾帝国が東亜新秩序の建設を完全に遂行致しまする事は全く難事中の難事と申さねばなりませぬ。然してその成否如何は一に将来国民の指導者たる諸君の双肩に懸つてあるのであります。第一次世界大戦に於きましては日本はやや有利な立場にありましたが為に朝野は挙げて好景気に陶酔致したのでありまして、それが如何なる結果を招来したかは諸君既に御承知の事と信ずるのであります。吾々国民はこの苦き経験を銘記せねばならぬのであります。尚此処に一言申上げたい事は漢民族は古来武力によつては屢々征服されたのでありますが、文化的には相当の自信を有し中華思想は今尚根強いのであります。従つて他民族の文化はこれを同化し自家薬籠中のものたらしめ得るとの確信を有してゐるのであります。殊に日本人に対しては儒教、仏教は勿論文字さへも伝へたのである、云はば文化的には支那の後輩であると云ふ考へは一般の思想ではないかと考へるのであります。従つて支那民衆をして日本人を畏敬せしめる事は容易な事業ではないのであります。是には日本の今日進んだ技術科学を以て誠心誠意彼等を教導する以外に方法はないかと考へるのであります。幸諸君は本学に於てこの方面に研鑽を積まれてゐるのでありますから、この科学の力を携へて将来大陸に活躍さるる事は尤も望ましく又効果のある方法であるのであります。この技術科学を通じて日本民族の優秀性を知らしめることこそ、東亜新秩序の建設の要点であると信ずるのであります。これを要するに、今夏酷熱と闘ひながら大陸に働かれた諸君の今回の事業はそれ自身大なる意義を有することは勿論でありまするが、是を一時の感激や興奮に終らしめることなく、進んで諸君がエルム学園の中堅分子となり全学園の気風振作に貢献し、学園は挙げて興亜聖業の達成に邁進する事となりまするならば、今回の事業をして真に意義あらしむるものであると存ずる次第であります。以上簡単ながら所懐の一端を述べて訓辞と致します。

総長　今　裕

（『北海道帝国大学新聞』一九三九年一〇月一〇日）

15　文武会解消式における今総長式辞

（一九四一年二月六日）

創立以来四十有一年の古い歴史を持ち、北海道帝国大学と共に、その名を知られて居りました我が文武会も愈よ本日限り発展的解消することに相成りました。文武会といへば、諸君は勿論、諸君の先輩たる幾多の本学卒業生諸君も頗る印象深い存在の一つであつたであらうと思ふのであります。毎年春秋二回の

全学的総会合や、文学、美術、宗教、芸術、スポーツ、武道等あらゆる分野に亘つて、夫れ夫れの特色を発揮致して参りましたのでありますが、元よりこれは、どちらかといへば会員相互の自主的団体でありまして、個人的修養鍛練に重点を置いて居りました関係上、その部門の撰択も自由であり、兎もすれば一方に偏したかの傾向が無きにしもあらずでありました。従つて本学の卒業生としては、是非これだけの事は経験させてやりたいと考へましても、これを経験せしめる方法すらなかつた憾みが無いでも無かつたのであります。然るに世界的な諸状勢は、従来の如き自由な考へを以てしては到底これに善処し得ない状況になつて参りました。爰に於て再び従来の施設を見直す必要に迫られて来たわけであります。この国家の飛躍的な要求から、従来の如き自由撰択による相互的修養機関では満足し得ず、教学の本義に基く師弟同行の強力なる団体的鍛成を必要とすることに相成りましたので、茲に北海道帝国大学報国会なるものが生れることに相成つたので御座います。これも国運進展の上に必要不可欠の要望でありまするが故に、数度に亘り協議の結果、全会一致発展的解消を致すことに意見の一致を見ましたわけで御座います。この事につきましては諸君は既に十分御承知の事と存じますので今更改めて申述べる必要もないかと考へます故、以上要点を申上げ式辞と致す次第で御座います。

（『北海道帝国大学新聞』一九四一年一二月一八日）

16 太平洋戦争開戦にあたって今総長訓示

（一九四一年一二月八日）

今朝六時突如として国民の耳朶を打つたものそれは大本営よりの発表による、我が陸海軍が西太平洋に於いて英・米両国と交戦状態に入つたといふ重大声明でありました。続いて午前十一時畏くも宣戦の大詔が渙発せられ、感激と昂奮と交々到つたのであります。

もとより、かかる事態の発生致しますことは予ての覚悟ではありますが、何せ今回の敵国は何れも世界最大の海軍と巨億の富を有し世界の最大強国を以て自負して居る国でありまするが故に、蔣介石如きを相手にしたとは事違つて、真に一億国民の最大蹶起を要する秋であることは論を俟たぬ所であります。

パストールは『学問には国境なきも学者には祖国あり』と申して居りますが、全くその通りで国家の危急存亡の場合には学者と雖も剣を執つて起たねばならぬのであります。彼のドイツの哲人フイヒテがナポレオンのプロシヤ攻撃の際、その重囲の中に於て『独逸国民に告ぐ』の大講演を試みた事はあまりにも有名な事であります。歴史の教ふる所によりますと元寇の際、時

の執権北条時宗は金剛経と円覚経とを自らの血を以て写し、外敵降服を祈願したと、伝へられて居りますが、胆斗の如き時宗にして尚且国難突破のために碧血を注いでその決意を示したのであります。今日は当に元寇以上の国難でありますから、国民の決意は時宗以上のものがなくてはならぬと考へます。殊に諸子は国民として最高の教育を受けつつあるのでありますから、かかる未曾有の国難に対しましては、真に一大覚悟を必要といたします。矢は遂に弦を離れたのであります。今は徒らに躊躇逡巡すべきときではありません。如何なる困難に遭遇致しましても必ずこの戦には勝たねばなりません。諸子の血液の中には何れも三千年来養ひ来つた日本民族の血潮が流れてゐる筈であります。今こそこの若き熱血を真に白熱化せしめねばならぬ秋であります。彼の西暦一千四百二十八年百年戦争の際、オルレアンの一少女ジャンヌダークがイギリス軍の重囲を突破し祖国の急を救つたことなど考へますと一念凝つて奮起致しますとき、驚くべき偉大なる力が生れますことは古今東西の歴史が明かにこれを証明致してゐるのであります。

伝ふる所によりますと、米国はカムサツカ並に沿海洲方面に対して空軍基地を借用したとのことであります。若しこの噂にして事実でありますならば北海道に対する敵機の来襲も、何時行はれるかわかりません。かかる時こそ諸子が平素養ひ来つた、全智全能を傾倒せねばならぬのであります。而しながら如何に英・米両国を相手に戦端を開始致しましたからとは申せ、徒らに昂奮のみして居てはなりません。どこまでも冷静に沈著に自己の任務に善処し、真に我がエルム学園の学生生徒たるに恥ぢざる態度と覚悟とを堅持致さねばなりません。只今までに於ける陸海軍部の発表によりますと上海沖に於て英砲艦一隻を撃沈し、更に米砲艦一隻を降服せしめた外、シンガポールに於ては奇襲作戦に成功し、グアム、ダバオ、マニラ等を空襲多大の戦果を収めたのみならず、遙かに遠く太平洋を渡つてハワイ真珠湾の米国軍港を爆撃多大の戦果を収めたとの快ニュースも入つて居りますので、幸先極めて良好でありまして喜びに堪へません。世界平和の美名にかくれて我が聖戦に妨害を加へんとする彼れ等に対しましては国を賭しても膺懲せねばなりません。『御稜威の向ふ所必ず勝つ』とは東条総理大臣の宣戦の大詔を拝しての講話の中に申された信念でありますが、この大信念こそ国民の一人々々が持たねばならぬ所のものであります。吾等は国際正義のため、将又東洋永遠の平和確立のため、断じてこの国難に殉ぜんことを諸子と共に誓ひたいと思うのであります。聊か感ずる所を述べまして訓示と致す次第であります。

昭和十六年十二月八日

（『北海道帝国大学新聞』一九四一年一二月一六日）

17 北海道帝国大学創立第二十五回記念式における今総長式辞

（一九四三年二月六日）

本日茲に本学第二十五回の記念日を迎ふるに当りまして、教官各位並に学生生徒諸子と過去を顧み現在を想ひ年と共に伸び行く本学の将来を考へます時、限り無き慶びを感ずるので御座います。惟ふに客年は有史以来未曾有の一大戦争でありまして、全地球上到る処に戦ひが繰展げられ、我国に於きましても太平洋の全面に亘つて人類の敵とも申すべき米英両国に対し徹底的打撃を加へ、全く世界戦史上空前の大戦果を上げました事は御承知の通りで御座います。友邦ドイツ、イタリーに於きましても、或は南露に或は北阿に何れも輝かしい戦績を収めつつありまして、私共は一日も早く米英撃滅の日の来らんことを希ふ次第で御座います。然し乍ら敵国米英もさるもので、引続く敗戦にも懲りず最近漸く陣容を立て直し執拗にも本年は我が本土を目差して爆撃を加へんと積極的攻勢に出でつつ相当の手ごわさを見せてをりますことは、数次の発表によるソロモン群島方面の戦闘が雄辯に物語つてゐるのであります。従つてこれに対し万全の策を樹てると同時に、更に進んでアメリカ本土に痛撃を与へ彼等をして再び起つ能はざるに至らしめ、以て真にその非を悟らしめねばならぬと考へるのであります。

客臘十二日畏くも天皇陛下におかせられましては神宮御参拝皇祖天照大神の大御前に親しく御告文を奏し給ひ、御躬ら国難克服を祈らせ給ひました大御心を拝察致しまして、一億民草ただただ恐懼に堪へなかつたので御座います。征戦のただ中に於て天皇陛下の神宮御参拝の御事は、神宮御鎮座以来未だ曾てその例を見ないので御座いまして、之を以て見ましても如何に今次の聖戦が重大であり且つ今後の事態が容易ならざるものあるかがひしひしと感ぜられるので御座います。

若し万一敵機来襲等の場合には、或は一切の学業研究などを廃し国土防衛の任務に服さねばならぬかも図り難いのでありますから、何時如何なる場合と雖も直ちにこれに即応し得る様心構へをして置くことが肝要であると存ずるので御座います。

さて本学過去一箇年間に於ける出来事について回顧致しまするに、先づ第一に挙げなければならない事は客年六月二十四日東久邇宮殿下御来学の事で御座います。殿下には国土防衛状況並に各種産業部門御視察のため御来道遊ばされたので御座いますが、同日は特に本学に御成りの上本学防護団の防火、防毒、防護等の演習を御視察遊ばされ、学内一同は光栄に感激致したので御座います。越えて七月廿日には梨本元帥宮殿下大日本防

空協会総裁並に大日本警防協会総裁の御資格を以て御来学の上、北方文化研究室に御成り遊ばされ千島に関する文献等御興深く御覧遊ばされたので御座います。十月六日には梨本宮守正王妃伊都子殿下本学植物園に御成り遊ばされ、高山植物等いと御興深く御覧遊ばされたので御座います。かかる事柄は本学の歴史に銘記せらるべき事でありまして、皇室の御仁慈に対し感激致す次第で御座います。

又七月十二日には東条内閣総理大臣が来学致されまして、時局柄実践躬行の特に大切であることを諭されたので御座います。

本学の主なる人事につきましては、既に御承知の如く倉塚、小川、越智、小野の四教授が停年の故を以て第一線より退かれ名誉教授となられましたが、その中倉塚名誉教授には客年十一月十七日友邦満洲国へ旅行中首都新京に於て突然病を得て長逝せられました事は、惜みても尚余りあることで御座います。かく有力なる諸教授の退陣は一抹の寂しさを感ぜしむるものがありますが、後任と致しまして新進博学の諸教授が任命されましたので輝かしい前途を期待されてゐるので御座います。又学生課長として十有三年の長きに亘り本学の為に尽力せられました尾崎卓郎氏が司政官として南方へ転出せられまして、後任に高松教授が兼任致され、尚専任学生主事として本学予科教授でありました横溝政八郎氏が就任致され学生課の陣容は整つたので御座います。

ここ三四年間毎年大陸に派遣してをりました勤労報国隊も昨年は二十名の参加者があり大陸各地に於いてそれぞれ技術的任務につき、つぶさに奉公の誠を捧げたのであります。又石川、館脇両助教授には山西学術調査隊の一行に加はりまして山西省に於ける各種の調査を遂げ幾多の生ける研究資料を得て帰られましたので、さらにこれが学術研究の上に大なる寄与をされることと信ずるのでございます。

本学の研究業績と致しましては各学部共それぞれ専門の研究に精進致され、その発表されました論文は何れも権威あるものとして学界に重きをなしてゐるのであります。この他特に本学の誇りとする所は昨年五月理学部茅教授の「強磁性結晶体の磁気的研究」が帝国学士院に於て学界に対する特異の研究であるとして輝く学士院賞を授与せられました事で御座います。

本学は昭和十四年功力教授の「抽象空間論」の研究に於て学士院賞を授与せられましてから引続き昭和十五年には堀内教授が「化学反応速度論」の研究で恩賜賞を昭和十六年には中谷教授が「雪の物理的研究」で学士院賞を授与せられてをりますので、この点断然学界に重きをなしてゐるので御座います。又昨年十月京都に於て開催致されました日本学術協会大会に於て工学部

高桑教授の「選鉱に関する研究」、林教授の「航空写真測量に関する研究」が学術研究上特筆すべきものとして表彰されました外、本学教授今堀克己氏の「変化する音の新分析法とその応用」の研究に対し服部報公会から奨励金を授与せられましたことなどこれ又本学の名誉でありまして、この際表彰されました各位に対し深甚なる敬意を表する次第で御座います。

大詔渙発一周年の旧臘八日には札幌神社北島宮司以下の奉仕を得て支那事変以降本学関係戦病歿者五十三柱の慰霊祭を行ひ、遺族の参拝を願つたので御座います。

昭和十八年度の予算並に事業等につきましては目下開会中の帝国議会に提出中でありますから議会終了後でなければ確たる事は申述べられませんが、政府の方針として全国各帝国大学の大学院を拡充し、第一期、第二期に分ち第一期は二年、第二期は学科により二年又は三年とし定員は第一期五百名、第二期二百五十名として何れも給費生とし研究費等を与へて国家目的に即応する学術指導者を養成せんとするのであります。高等学校、大学予科等の修業年限を二箇年とし原則として全寮制度を採用し日本的性格を有する道場的教育を施す方針で、専ら訓育方面に力を入れることになつたのであります。而もこれに先だつて寮生諸君が能く自戒に勉められることは洵に喜ばしきことと存するのであります。

次に一昨年以来建築中でありました低温科学研究所も漸く完成の域に進みましたので、本年は本格的研究が進められることになつてをります。触媒研究所、超短波研究所の官制も愈よ公布されましたので、是又来年度に於て相当充実せしめなければならぬと考へてをるので御座います。講座の増設と致しましては工学部に通信工学第二講座と冶金学第三講座、同第四講座の三講座が予算に計上され議会に提出されてをりますので実現するものと確信致しております。

以上申述べました如く年一年拡大充実せられつつある本学の現状を考へまして、責任の愈よ重大なるを痛感致すので御座います。殊に現下の如き一面に於ては米英撃滅の世界的大戦争を為しつつ他面に於ては大東亜の共栄圏を建設致して行かねばならぬ秋に於きましては、科学と科学技術との振興を図ることは急務中の急務でありまして、本学の任務は益々重大さを加へつつあるものと考ふるので御座います。諸子は克く如上の意義を理解されまして、仮初にも自己の本分を怠るが如きことなきやう希望する次第で御座います。

（『北海道帝国大学新聞』一九四三年二月二三日）

18　就任にあたって伊藤新総長の挨拶

（一九四五年一二月五日）

時局重大なる時、総長の命を受け、その責任の重大なるを感じその任に当る積りである。本学は明治四十年来多くの発展をとげた。私は十九歳に本学に学び、農科大学の第一期生として卒業以来六十二歳の今日まで、本学に職を奉じてゐる。その間総長の交代は四回におよんだ。しかし大学の目的は教育と研究とにあるのは勿論であるとして、各総長によつて大学運営の方法が異つたのは、教育の運営はその時代に適応して行はねばならなかつたからである。しかし教育は時代によつて行ふけれど、時代を教育によつて作り出すことも必要である。肇国以来かつてなき敗戦の悲惨な現実、それに伴ふ道義の頽廃は憂ふべきものがある。今や他を非難することなく和衷協力私利私慾を捨てて国家再建に進まねばならない。戦争は破壊であるがまた文化の飛躍、旧套を脱すの好機である。われらは徒に悲観することなく大建設に向ふべきである。扨てこのやうな時代にわれらは如何なる目標を以つて進むべきであるか。明治維新に広く知識を求めたのはよかつたが、それが急なる余り実用的表面的にのみはしり、内面的実質的に、思想人格哲学的に、さらに理論科学的の進展では欠くところがあつた。教育も模倣、積め込み、暗誦等形式的な専ら儒教的教育法すなはち『教ゆる』ことを第一とし啓発自主の道を行はなかつた。むしろ『学問のための学問』を嗤ふ有様であつた。その例として大東亜戦初め軍部および国民は、科学者を冷視し学業を軽視して、『行』をしないのを誹謗して、盛に神憑り的非科学的教育を強要したのである。しかし戦が不利となつて科学の振興を叫び時には敗戦責任は科学者に存すといふやうな責任転嫁さへもした。われらが馬穴竹槍練習をしてゐる間に一見何の役にも立たない学者の一遊戯と見られたボア教授の原子物理学が大戦の終止符を打つた。この一例からもわれらは真理の愛好、科学の尊さに目覚めなければならぬ。諸君の修学の目標もここにあるのである。

若し教育が自由なる人格、自主的な思想、自粛的な行動を目的として行はれ、文化水準、科学的知識が高まつてゐたら、敗戦は勿論、こんな戦争はしてゐなかつたであらう。それ故教育は国家再建の初めであり終りである。又大学は実務家の養成のみでなく真理探求、科学の追求者を産むのを目的としてゐるから、受動的なものに甘んぜず自発的に学び、ガリレオが強大なる教権の圧迫下に『それでも地球は動く』と地動説を唱えたる如き信念を持つべきである。今一言すべきは近く諸君の大部分が選挙権を持つに至るであらう事である。選挙に当つて諸君は政党

の主義主張を充分批判する力を養ひ、正しき代表者を選ぶ責任がある。学徒は国家の柱石であるから、正しき信念と批判をもつてあたるべきである。

諸君は目下政治家ではないのであるから徒に政論等に耽ける愚をしてはならない。今や国家は青年特に知恵のある諸君に期待するところ大である。大学の諸君の任務は重大である。学徒諸君は戦時中大いに努力し、その功大である。然しそれは報ひられず、学力低下、気力の失墜および品性の下落となつた。これを諸君に責むものではないが、渾身の精神でこの不幸不運を挽回せねばならない。かかる重要な時に石炭、食糧事情より教育研究を一時中断しなければならぬのは遺憾である。また本学は爆弾は免れたが多くの補修、研究施設を要する。しかし国家経済はこれを許さんことを考へると憂鬱である。然し諸君希望を捨ててはならぬ。如何なる力も諸君の人格、知能を奪ふことはできない。相抱いて餓死するとも、共に助け、共に親み、好学の精神を失はず、国家再建に邁進せんことを望むものである。此処に愛する諸君に衷情を披瀝して新任の挨拶とする。

（『北海道帝国大学新聞』一九四五年一二月二五日）

19 新制大学入学式における伊藤学長訓辞

（一九四九年七月二八日）

本日新たに入学せられました諸君を迎えまして、茲に入学式を挙行致しますことは、本学の誠に欣快とする所であります。諸君は何れも皆多年憧れた最高学府に入学せられたのでありますが故に、諸君の満足は必ずや大であり、又諸君の背後にある父兄の悦びや測り知るべからざるものであろうと思います。私は茲に満腔の祝意を表するものであり、又平和国家再建の途上諸君の如く有為学徒を迎えました事は、祖国日本の為めに祝福してやまざるものであります。

思うに本日の入学式は例年の入学式とは異り新制度による北海道大学の新しい発足の日であるのでありますが故に、聊か詳しく所懐を申述べたいと思います。

抑々我国の学校即ち一定の施設方案を以て継続的に教育を行う設備を設けたのは、天智天皇の二年といわれて居るけれどもその内容等は明かでありません。文武天皇の大宝元年に制定された大宝律令の中に学令があって、大学及び国学の規定が設けられたのであるから、西暦七百年頃に已に大学があったという事になりますが、之は全く支那の模倣であって凡そ其の趣の異

ったものであります。

一般国民の教育機関が制度として実施されるに至ったのは明治時代からであります。明治維新の大改革は政治、社会は勿論の事文教に於ても一大変化を来しました。即ち明治二年東京大学の前身たる東京昌平学校を大学校と改めた事の規定を見るに「神典に依つて国体を辨へ兼て漢籍を講明し、実学実用を成すを以て要とす」とあります。殊に大宝令以後日本の学校は孔子を祀って居ったのであるが、明治維新の際に祭神を異国に求むるは不可である、宜しく我国の神となすべきものであるというので天照大神以下諸神を祀ったというが如きは明治初年に於ける我国教育の根本精神を覗え得ると思われます。

明治四年七月文部省設置、五年八月学制頒布を見、全国を八大学区、二百五十六中学区、五万三千百六十小学区に分ち、各区に一校宛を置き教育の普及を計ることと致しました。之れが本邦教育制度の基礎となったものでその時の大学の規定が「大学は高尚の諸学を教ゆる専門科の学校なり」と記されるるに至りました事は一大進展といわねばならんと思います。当時我国は欧米文化の取り入れに急なる余り、諸般の事項皆只その模倣に終始し、人心軽跳浮薄道義頽廃し、種々の社会改良を叫ばるるも総て皆真の自覚、自主的批判からでなく、只欧米心酔に過ぎなかった所謂鹿鳴館時代の現出を見るに至ったのであります。

此の欧米文化吸収の結果、明治十九年三月、大学、師範、中学、小学の法令が制定され、大に教育制度が整備さるるに至り、此の時に東京帝国大学が出来、大学は「国家の須要に応ずる学術技芸を教授し、及び其の蘊奥を攻究するを目的とす」と定められました。即ち之れによって国家に須要なる事と研究との面を書き加えられました。然るに前述の如く当時国民思想の墜落が甚しかった為めに国粋保存の声も漸次盛となり、遂に二十三年二月に朝野の一大問題となり、事文教の根本方針に関するものが内閣更迭に伴って動揺すべきでないから詔勅の御下賜に依るべきであるとの閣議の結果、最初の帝国議会の開催に先じて、十月三十日附を以て「教育勅語」を下賜さるるに至りました。かくて教育勅語は元来我国の教育方針、我国民道徳の指針たる金科玉条となったのであります。凡そ一つの国家をなす場合に於て、その国民が一つの目標、理想の中心を持つことは絶体的に必要であります。此の点に於て従来教育勅語の有した力が極めて偉大であった事は万人の等しく認めるところでありました。

かくて教育勅語の大方針に則り、東京帝国大学に次いで、京都、福岡、仙台、札幌等の地に帝大を設け遂に七帝大を設くるに至りました。

元来我国の大学は専ら其の範を独逸に取ったものが多いのであります。之れは全く世界に於ける近代的大学なるものが十九世紀の始め即ち独逸がナポレオンの為めに破られ悲痛なる決意を以て立ち上らんとして一八一〇年伯林に大学を作り、理想的に学術の研究と教育とを合致した自由なる学術機関としたので、各国皆之れを模範としたからであります。

然るに第一次世界大戦（一九一四―一九一八。大正三―七年）後は各国共に大なり、小なり大学を国家主義的教育研究機関に変更し、自らの一国家の為めの職業準備をなすに傾いたのであります。元来我国に於ける大学が創立の当初から斯る理念を多分に含んで居ったのでありますが故に、各国の趨勢と共に大正七年十二月、大学令の第一案を「大学は国家に須要なる学術の理論及び応用を教授し、並に其の蘊奥を攻究するを目的とす」と改め玆に国家主義の色彩を濃厚ならしむるに至りました。

然るに我国は二十年八月十五日敗戦降伏占領の悲運に陥り、玆に種々なる反省悔恨が起り必然的に憲法に対する検討が考えらるるに至り、又他面に於てポツダム宣言を履行せねばならないが為めに憲法改正をせねばならぬ運命に立ち至りました。

元来大日本帝国憲法は明治二十二年二月十一日に発布され五十九年間行われて来たものであるが、当時の起草委員の言明して居るが如く、本憲法は「哲学的、純理的法律学によらずして歴史的法律学を以て解釈するに非ざれば、其の真髄を得ること能はず」であり、その理念として次の如く書いてありました。

「名は同じく立憲政体であるが、我国では主権は即ち神の威霊の現化であつて、主権の尊厳は即ち神霊の尊厳である故に憲法は天皇の勅令であつて、天皇は憲法の上に位し、絶体神聖にして犯すべからざるものである」

然しながら一面に於て十八世紀末より十九世紀に各国で制定した憲法の殆んど総てが民主主義的に編まれて居るが為めに、多分にその影響を受けて制定されたのであります。従って今日より之れを評すれば、民主主義思想の実現を使命としているが、其の実現を無制限にしては我国体と相容れぬに至るから、之れを制限するように苦心して作られたものであります。それ故に今日新日本国憲法を制定するに当っては伝統的歴史主義を棄て純理論的に改変せねばならぬ事となって「戦争を放棄して平和提唱」「基本的人権の尊重」「民主主義政治の確立」なる三大根幹の下に立たねばならぬことになり、之れによって新憲法が制定されました。かかる場合に於て我国教育の指針たる教育勅語に対しても、その歴史的意義を乗てて教育理論そのものの上に立って純理的に検討さるるに至った事は、蓋し必然的な帰結と云わねばなりません。

今日之の問題について一々評論する余裕を持たないけれど

も、結論としては現日本国憲法の理念としては、之れを存置することは都合のよくないという事となって、多年我等の目標とし、金言とした教育勅語に別るるに至り、国民一般がその趣く所を失い、空々漠々たる状態に陥ってしまった。

茲に於てか国家は之れに換って、国民教育の根本理念を明示せざるべからざるに至り、昭和二十二年三月三十一日「教育基本法」を制定公布致しました。

此の教育基本法は先ず「個人の尊厳を重んじ真理と平和を希求する人間の育成を期すると共に普遍的にして、しかも個性ゆたかな文化の創造をめざす教育を普及徹底しなければならない」のであるから「ここに日本国憲法の精神に則り教育の目的を明示して新しい日本の教育の基本を確立するためこの法律を制定する」と前置きしてその第一条（教育の目的）に於て次の如く述べてあります。

「教育は人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人の価値をたっとび勤労と責任を重んじ、自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行はれなければならない」

果して之れを以て直ちに従来の教育勅語に取って以て代り得るや否や、或は新しく所謂「教育宣言」又は「国民指針」の如き日夕唱和して国民を善導するが如き成文を必要とするや否やは、今後に於ける問題として残されて居るのでありますけれども、兎に角本法のこの第一条は明かに教育の世界的理念に合致して居るものであると云わねばなりません。

次に教育は何といつても学校教育がその主要なる部分を占めますが故に「学校教育法」を同時に公布し、之れによって我国の学校制度は一変せられて、茲に六、三、三、四制を取る事となりました。之の法は①従来の本邦学校の体系が極めて雑然として居た事、②義務教育年限が短かった事、③男女共学でなかった事等を是正し殊に、④初等普通教育、中等普通教育、高等普通教育及び専門教育を行う年限は教育心理等の見地から人間の心身発達の程度に従って区分せらるべき事、即ち Infant, Pubescence, Adolescence, Adult. に分つことが理論的であるというのであります。勿論之れ等の諸点についても議論もあり、又各国必ずしも一様でもありません。殊に日本の経済状態から実行は甚だ困難ではありますけれども、何としても之れを行わねばならぬ状態にありましたが為めに、新制度によって二十二年中学、二十三年高等学校、本年大学を開校するに至りました。

今他の学校の部分は暫く措き「大学」の部に於て見まするに「大学は学術の中心として広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開することを目的とする」と述べてその性格を明かにされてありま

す。

以上私は要々「大学」の目的として掲げられた条文を一々述べたのでありますが、之れによって見ましても我国家そのものの変遷の跡を如実に知る事が出来ると思うのであります。

かくて従来の不完全なる教育概念を抛って民主的な文化国家をめざし、個人の価値を尊び、人格を完成し、真理と平和とを求むる人間の育成をなさんとするに至った。しかも大学は一国文化向上のために常に先導者となるものであり、知的道徳的に極めて重要な位置にあるものであることは何等説明を要せざる所でありました。

此の改革に基いて二十二年十月一日、北海道帝国大学は北海道大学と改称しました。其の後新制大学設置に就いては、大学設置委員会の活躍を見、幾多の波瀾を経て本年五月三十一日漸く「国立学校設置法」の制定を見るに至り、六十九の国立大学が設けられ、北海道大学は従来の北海道大学に予科、附属農林専門部、附属医学専門部並に函館水産専門学校を包括し、附属土木専門部を室蘭工業大学に移して法文、教育、理学、医学、工学、農学、及び水産学の七学部を設けらるる事になりました。東北大学は八学部、東京大学は九学部、名古屋大学は六学部、京都大学は八学部、九州大学は八学部からなっております。大体に於てこの七つの大学は八学部であって東京大学は教養学部のある為めに九学部、名古屋大学は法経が分離せずに、農学部がない為めに六学部であります。本学は未だ法文経を分離することが出来なかったが、他と異って水産学部を加えましたので七学部となって居るのでありまして、水産学部の他の大学にありますのは東京水産大学、長崎大学及び鹿児島大学で、広島大学には水畜学科というのがあります。従って本学と致しましては一日も早く法文経の分離を念願している次第であります。

次に教職員各位の非常なる努力によって今日より発足しました此の新制大学の構想、運営の特質に就て予め充分なる理解を持つことが必要であります。

①新制大学に於て従来の大学と非常に異なる特長は一般教養に重点を置いてある事である。即ち専門学科を修むるに先立って人文科学、社会科学、及び自然科学の総てに亘って、基本的な智識を得ることは、広い視野に立っての人生観、世界観を確立し、或は人格を完成し、社会人としてこの充分なる資格を得る上に於ても、又専門的研究の基礎としても、極めて重要な事は敢て言を俟たざる所であります。然るに従来は殆んど之れを度外視し専ら高等学校に任せて居ったのであって、従って従来の高等学校は勿論之れに貢献しては居りますけれ共、ややもすればそれが全く大学入学の準備にのみ傾き又其の分野も狭かった

事は事実でありました。更に従来の専門学校に於ては之の点については、殆んど閑却されてあったといわねばなりません。それ故に此の一般教養の学科を修め、広き世界を自由にながめ、自己の能力によって専門学科に進むことが如何に有利であるかは言を俟たざるところであります。

②第二の特長とする所は高等専門技術教育が学問研究の準備教育と同様に重点を置かれた事であります。従来の大学に於ては多くの学生が専門技術を得て実社会に出づべき筈であるに拘らず、寧ろ学者をのみ養成するが如き状態であり、其の技術の方面は、専ら専門学校に譲って居ったのであります。之に対する欠陥を是正せんと試みられて大学は高等専門教育機関であり、又研究機関に進むべき準備機関とし研究及研究者養成機関としては更に大学院を置くことにしたのであります。

③第三の特長とする所は従来の詰め込み主義を廃し、学生諸君の自発的自習に重きを置いていることであります。之れ等の詳細なる点は「学習指針」等によって充分承知されたい。従って学生諸君が自ら進んで自らを啓発し、真の実力をつけて行くや否やによって非常なる学力の差を来すべきである事を注意せねばならんのであります。

④第四の特長としては従来と異った性格の大学院の存在であります。学校教育法第六十二条に「大学には大学院を置くことが出来る」第六十五条に「大学院は学術の理論及び応用を教授、研究し、その深奥を究めて文化の進展に寄与することを目的とする」と規定しております。之の目的は殆んど全く従来の大学の目的として規定されたものと同一なもので、大学院は研究機関であり、研究者養成機関であるのであります。それ故に広義の大学は大学と大学院との両者があって始めてその充分なる使命を全うすることとなります。本邦の現状よりすれば綜合大学に於てのみ大学院を置き得る状態であり、本学に於ては勿論之れを設けて完璧を期することとなります。

以上種々新制国立大学に就き述べ来ったのでありますが、かかる新制国立大学は已に六十九校設立され、一見文化隆盛教育振興は実に旺なりと称すべきでありましょう。然しながら退いて考うるならば其の目的構想は甚だ美であるが、果して其の実績を納め得るか、又其の量に於ては多いけれ共、果して其の質はどうであるか、これ等の点に想を致すならば甚だ危惧の念に堪えざるものであります。事実に於て校舎の狭隘腐朽、設備の不充分、教育研究費の不足、生活費の不足、住宅の欠乏、学資の枯渇、数え来れば実に問題は山積して居るのであり、従って教育復興、大学の危機が叫ばれるのも無理からぬ事と思われます。然しながら之れは敢て大学のみの問題ではないのでありまして、日本国全般の問題であり、日本そのものの危機であるの

であります。従って敗戦降伏占領なる冷厳な事実を認識し善く客観的情勢を理解し、一致協力、臥薪嘗胆、私利私欲を去って此の難関を切り抜けなければならん時であって、徒らに自暴自棄に陥り或は暴論、暴挙に出づべき時ではないと信じます。要するに新制大学の実を挙ぐるには、教職員学生凡てが頭の切り換えを必要とするのであろうと思うのであります。諸般の制度法律は死物であって、之れを生かすも殺すも、人にあるのである。日本を亡ぼすも興すも外敵であるのではなく、国民そのものにあることに思を致して努力すべきであると信じます。

今や諸君は各々志を立てて夫々の専門を修めんが為めに本学に入学されたのである。然らば其の専門を修むる為めに全能力を傾注することが当然の事であります。然るに往々近時遊惰に流れ、或は政治運動に走るところのものがあります。遊惰については何等云々するところの必要もないが政治運動について聊か諸君の注意を促したいと思うのであります。勿論学生諸君には已に選挙権を与えられて居り、政治に無関心で居ることは出来ません。又政治運動にたずさわってならんという法律もありません。然しながら私は一個人としての老婆心から学生諸君が自ら修めんと志した専門を度外視し、学生たる本分を逸脱して政治運動に没頭するが如きは決して好ましい事でないと云わざるを得ないのであります。元来右翼たると左翼たるとを問わず、急進的な思想は熱と力とをもつ青年時代に於ては極めて之れに入り易いものであります。

然しその場合、常に之れに反対なる理論、主張をも充分に検討し、両者を比較研究して後、始めて其の動向を決することが、いやしくも学に志すところの学徒諸君の当然とるべき道であると思います。只徒らに附和雷同すべきではないと信ずるものであります。要するに諸君の大学に於ける四年乃至六年の期間は諸君の一生の運命を定め、之れを大にしては、人類福祉の進展に関するところの最も大切な修業の期間でありますが故に、各自品性を高潔にし、人格の修養と共に日夜熱心に学業を履修し、誓って他日の大成を期せられんことを入学の当初に於て切に切に希望致しまして本日の訓辞を終りと致します。

（水産学部『親潮』第一一四号）

20　予科終校式における伊藤学長式辞

（一九五〇年三月三〇日）

本日茲に予科修了者理類三八〇名、文類六一名、計四四一名の証書授与を致しました事は本学の誠に悦びとするところでありまして、修了者諸君は勿論、その背後に存する父兄各位の悦びや極めて大なることと思い、茲に満腔の祝意を表するもので

あります。又日頃鋭意教育の重任に当られました教職員各位に対し深く敬意と謝意とを表するところであります。

思うに修了生諸君は二十二年の春、時あたかも新憲法発布後約半年を過ぎし頃、入学せられたのであって、その当時の日本の状態は社会的にも経済的にも極めて悲観せざるべからざるものであり、一般国民は放縦を以て自由と誤り、無礼無秩序を以て平等と解し、生物的通有性を以て人間の全貌と思い、人心頽廃、道義失墜、誠に目を蔽うべき状態であったので、当時私は諸君に先ず吾々は人格を完成し、真の人間たるべきことを説き、諸君が科学の研究に志し、文化の創造へ貢献せんと欲して、この学園に入学せる以上、常に謙虚な心を持って、身体を大切にし、経済的困難に打ち勝って修学せられんことを要望したのであります。

現今社会各般の情勢は、稍々鎮静を来しつつありますけれども、諸君在学中の大部分は、依然として楽観を許さぬ窮迫、混乱の時であったのであって、日本の教育史上未だ嘗て見ざる学生運動等の勃発を見たのであります。然し諸君は其間に処して、健実なる思想、強靱なる信念を持ち、学徒としての本分を逸脱せずに、よく之れを乗りこえ、今日あるを得ました事は、誠に悦ばしい事であります。然しこの悦び、この得意の時こそ反省をなすべき絶好の機会であります。人は反省の機会を多く持つ程幸福であり、反省なきところに進歩はない。果して諸君は後を省みて悔ゆるところなきや否や。蜂は暗闇でなければ蜜をつくらぬ。脳は沈黙でなければ思想を生ぜぬのであるが故に、この恵まれたる静かなる北海の大自然の下に、静かに深く考えよ。そして自己の責任を深く自覚する程度によって、その人の教養の深さを量ることが出来るものであることを銘すべきであります。

かくて諸君が更に進むべき各々の道に於て希望と光明との輝けることを思うときに、諸君の前途に対し、心から祝福するものであります。尚玆に一言すべきは今回の修了者中に、二名の女子の方の存することであります。之は予科開設以来始めての事であります。今日かかる事を事珍らしく取りあぐる事、その事が已に恥しい事であるのであります。男女の智識、能力が本質的に差違なき事は当然であるのでありますが故に、男女共学の先駆者として、更に更に輝しき将来を築き上げられんことを祈ります。

次に本日は修了証書授与式であると共に予科そのものの終了式でもあるのであり、諸君は実にその殿将軍であるのであります。古来殿将軍が重要なる名誉ある地位であったとはいわれるものの、後(ご)づめのないのは聊か心淋しい感がないではありませんん。しかも元気溌溂たる質実剛健の長い伝統を誇った予科の終

りの日であるのでありますが故に、卒業生は勿論、親しく教鞭を執られた新旧教職員各位に於ても感慨一としお大なるものがあると思います。

若しそれ、予科の濫觴を求めますならば、遠く札幌農学校設立当初に溯らなければなりません。札幌農学校が我国農業専門教育の嚆矢として北海の広野に開設せられましたのは一八七六年即ち今より七十四年前で、今の新制大学と同様四ヶ年制であり、之れに入るべき学生を養成するために三ヶ年の予備科を置き、年齢十二歳以上のものを試験の上入学せしめ、クラーク先生がその教育を掌ったのに始まります。従って予備科の修了生の出ない間は、東京に於ける大学予備門等より入学せしめたものであって、明治十一年に始めて予備科より本科へ進入者を入れたのであります。その後数回の変更を経まして、中学卒業生を入るるに至りましたのは三十一年五月、一八九八年で、名称を予修科と改め、予修科二年、本科四年、合計六年で農学士となったので内容に於て帝国大学と同一となりました。それ故に今日の予科は此時を以て発足したとも考えられるのであって、若し之れを以て始ったものとすれば茲に五十二年となります。

然るに明治四十年、一九〇七年六月、札幌農学校は大学の班に入りましたので、予修科を大学予科として三年、本科は三年となり、茲に始めて予科は旧制高等学校と全く同格となったのでありますが故に、今日の予科は此日を以て真に成立したともいうべく、それでありますれば四十三年を経過した事となります。

何れに致しましても、此間に出でました多数の修了生は其性格上、当然本学学部に進入したのでありまして、今日本学が愈々益々発展し、北方に於ける厳然たる学府として認められるに至った事は全く予科に負うところ誠に大なるものであるのであります。その間に於ける歴代の主宰者を始めとし多数の教職員各位が真に献身的な誠心誠意を以て尽瘁せられました事に対し茲に衷心より感謝せざるを得ないのであります。

戦後学制の大改革が断行され、大学は昔の札幌農学校の如く四年制となり、遂に予科は茲に全く廃止の運命に到達しました。物の始りは建設であり萌芽であり、その将来が祝福さるるが為めに、事の大小を問わず、明るく愉快であるが、物の終りは淋しいものであります。物始りあれば必ず終りありとはいうものの、教育機関に於てかかる急激な変化の起ることは何人も想像しなかった事であり、従って旧制高等学校廃止にあたっては、極めて激しい論議が行われました事は、今猶吾等の記憶に新たなるものであります。殊に吾が予科は夙に質実剛健を以て世に鳴り、学術的にも思想的にも、将た又運動界に於ても毅然たる存在であったのであるが故に、更に更にその感を深くする

ものであります。然しながら翻って考うれば吾等は日本無血大革命の時に当って徒らに感傷的であってはならない。彼の希臘神話にある Phoenix 所謂不死鳥の如く、その身老いて薪をつみ火を放って自ら焼失しても其灰燼の中から雛鳥が生れ出て再び活動をつづくるというが如く、今や予科は失わるると雖、その精神は実に不死である事を、嘗つて私の最も敬愛する元予科長宇野先生が論された事があった。誠に然りであって、そこに新しき生命は再び吾が大学に蘇ることを疑わないのであります。かくて吾が学園は依然としてエルムの木蔭に永遠の真理を求め、延齢草と共に永くその齢を延ばすことを疑わない。

諸君よ、幸に心身共に健在なれ。高鳴る血潮の迸りもて、貴きB、B、A、の訓へに培へ、以て末永く栄え給へ。諸君は輝しき成人を約束されたる青年である。リットンは已に叫んでいる。「輝しき成人を約束されたる青年の辞書に存せざる言葉あり。曰く、失敗」と。実に諸君の将来には失敗はあり得ないのである。茲に私は衷心より諸君の上に幸多かれと祈って私の辞を終りと致します。

（自筆草稿）

21　大学祭にあたって　島学長談

（一九五二年一〇月三〇日）

昔お祭りと云えば、鎮守の祭礼のように、神社を主体にした謂わば宗教的儀式に伴った行事で、或る日をきめて、民衆が業を休み、色々催物などして楽しみ暮すのがそれであった。

子供の時分を顧ると、お祭りは楽しかったものの一つであったように思う。午後は自由参拝なぞといえば、大人と雖も満更でなかったように思われる。今日この頃のお祭りは、神人相接の本来の祭典ばかりでなく、神様の参加しない、人様だけの祭りも少くなく、宵宮に似た前夜祭などと云うお負けさえある。感謝景仰或は記念祝賀の意を表わすため、諸々の催物をして、同時に人々が楽しみを分ち且休養を摂ると云った祭もあれば、多少奉仕の意味を含めた広告宣伝の祭もあろう。

単なる「マツリ」と何かを「マツル」とでは、意味に相当の開きがあろうが、何れにしてもお祭りは個人的たると公共的たるとを問わず、又規模の大小に論なく、好ましく、楽しいものであろう。我々に報恩感謝或は反省、或は奉仕の機会を与えてくれるだけでも意義があり、まして心身の慰安休養ともなり、世間と云うか、庶民相互と云うか、理解と信頼とが其間に保たれて行くものとすれば幸せと云わねばならぬ。

我国の大学祭が何時頃始まりどう経過して来たかを玆で考究する余裕を持たぬが、何れ創立記念日等を中心に、前後何日かに亘って、大学其のものを紹介すると共に、体育、文化の諸行事が綜合的に展開された場合に多少流行的に、この祭りが適用されたようにも思われる。学生を主とし、之に職員の参加を求めた団体の始まりは、本学では明治十年クラーク教頭の勧誘で出来た札幌農学校の開識社である。其後学芸会が出来、次で本邦に於ける運動会の元祖と云われる遊戯会が出来、之等が合体して明治三十四年に文武会が成立した。大正以後は学部の数も多くなり、団体も増加したので全学的の催しをすることは、中々難かしくなったので、自然大学祭と云う形に統一されたのである。勿論統一と云っても、今日九学部を擁する北大に於て、全学生、教職員が一堂に会して何かの催しをする事は、色々の面から考えて不可能である。然し期日を定め、各団体が協定したプログラムで、全学的統制の下に行事を進めることは、さ程困難でなく、大学祭としての意義を持ち得ると思う。

先ず大学祭に望みたいことは、如何にも大学の名に相応しい、品位のある催しである事、学生はその好む処に向って欣然参加且つ協力し、大学祭は学生自らの手で、しかも自らの為に催されるものであることを認識する事、この機会に便乗して、学生のためにならぬ一党一派の宣伝をしてはならぬ事等である。参加団体は、名誉と責任とを重んじ、平素の研究、或は練習の成果を発表して、自他共に楽しむ事が本大学祭の眼目であると思う。唯今回は、各学部の研究室の一部が開放され、資料或は実験等が公開される筈である。それ等の研究室が、不便、不自由を忍んでも、公開を許可した所以は、大学エキステンションの一部として、社会に奉仕せんとする意図に外ならぬのであるから、関係の学生諸子は、当日研究室内外に於ける秩序の維持に万全の用意をして頂きたい。何れ期間中は、多人数の視聴を集めることであろうから、あくまでも学生の矜持を失わず、しかもレクリエーションの目的が遂げられるよう希うものである。

（『北海道大学新聞』一九五二年一〇月三〇日）

22 新制大学第一回卒業式における島学長の告辞

（一九五三年三月二五日）

本日学制改革後の新制大学第一回卒業式を挙行するに当りまして、各学部長、教職員並びに父兄各位列席の下に、新卒業生諸君と会して、送別の言葉を述べる機会を得ましたことは、私の喜び且つ幸とする所であります。

今回所定の単位を習得し、学士号を授与されましたのは合計

七一四名でありまして、内文学士三〇名、法学士七二名、経済学士七一名、教育学士一〇名、理学士五四名、工学士一五八名、農学士一六一名、水産学士一五八名であります。

卒業生諸君、お芽出度う。今や諸君は、多年螢雪の功成り、四年間の大学教育を卒えて、愈々社会に出るのであります。諸君が本学に入学された時分は、敗戦後の国内激動期が稍落ち付きを示した時でありましたけれども、国民の生活は決して容易でなく、諸君の大部分はアルバイトと学習との矛盾に甚しく困惑したことは我々もよく知って居るのであります。更に又諸君は中学と高等学校の時代を戦前戦後の動揺期に過したのであるから、之は又一層諸君の学習を妨げたであろうと察しられるのであります。要するに諸君が過して来た学窓の大半は極めて不利な条件下にあったことも推察し得られるのであります。恰かも新制大学開設怱々の事にて教育の面に於ても、教室其他の設備に於ても不完全でありまして、其点私は諸君に対し誠に申訳なく存じて居ります。それにも拘わらず是等悪条件を克服して諸君は克く心身の健康を保持し、自らを励まして、学問の途を外れず、茲に芽出度く卒業の栄冠を得られたのであるから、諸君自身の喜びは勿論、今日あるを期待された諸君の父兄におかれてもさぞかし御満足であろうと存じまして、茲に心からの祝意を表するものであります。又学部長其の他の教官各位に於かれても、其責任の一端を果たされたので、言外に其喜びを堪えて居るものと存じます。

さて諸君の門出に当って先ず新たなる決意を要請したいのであります。それは諸君が我国教育制度改革に伴って設置された新しい大学の第一回の卒業生であると云う点に懸って居ります。新らしい大学の理念については既に諸君入学の当初から聞いて居り、更に在学中に会得したことと思いますので、私は茲に之を繰り返す必要を認めませんが、私立の大学等では既に卒業生が世に出て居るので、新旧大学の卒業者を比較して、種々の批判が世上に行われて居ります。卒直に申せば、新制大学の卒業者は其の知識能力ばかりでなく、人物に於ても、旧制大学の卒業者に劣るとさえ言うものがあります。専門の知識に於て劣ると云う事は或はあるかも知れません。それは新制は旧制に比べて専門に関する講義、演習、実験等の時間数は少ないからであります。人物の点になると色々の見方があるから一概には論じられないが、若し人間的教養からの見解であるならば、それは我々の容易に首肯し得ない処であります。何れにしても新旧の比較論は時期尚早であります。然し乍ら諸君が今直面せざるを得ない就職関係に於ては、是等批判が障害に成らないとは断言し得ないのであります。従って卒業に際し新たなる決意を以て諸君の持つ処の知性と良識とを充分に発揮して貰いたい

のであります。新制大学の教育を受けた諸君を以ってコチコチの専門家と見るのは当らないのであります。諸君は、人文、社会、自然の科学系列を通じて人格形成の一般教養を深め、更に各学部の専門教養を身に着けた筈であります。若し諸君にして、自分の選んだ専門分科に就きもっと深く研究して見たいと希望するならば、大学院に入れば宜しいのであります。

然し、直に職場に就いたとしても、学問の仕方を心得ているのだから、謂わば自修自得に依り、必しも大学院に入らなくてもエキスパートに成ることは可能なのであります。諸君に、既に新制大学卒業程度の素養があり、何事に対しても正しく判断し評価し得る自主の精神と実践の能力が伴うならば、諸君の前途は洋々たるものでありましょうし、新日本の建設にも希望が持てると云えましょう。然し、昔から論語読みの論語知らずと云う諺がある通り、一般教育を受けた諸君に若しも人間性は乏しく、視野は狭く、考え方は偏頗であると云う批判が与えられることにでもなったとしたら、之は大なる恥辱であると云わねばなりません。故に諸君の自重と反省とを求めたいのであります。勿論人間完成のための教養への努力は終生続けて悔なきものでありましょう。まして時の流れに従って、貴重な体験が加わることを考えれば、教育の問題は、社会人となってからも捨て去ることの出来ぬものであります。

さて諸君が卒業と同時に直面する就職問題に就いては、特に本年は新旧大学の卒業生十数万人が社会に殺到すると云う壮観でありますので、新聞雑誌等に責任の無い勝手な議論が現われています。無論是等の議論は空転して居て、せいぜい希望的観測を述べているに過ぎません。要するに人を求める側にも色々考えて貰いたい点、例えば採用人物の選り好みを余りして貰いたくないと云ったような点がありますが、この人を求める側の注文は別として、職を求める側としても徒らに焦せることなく、よく考え、眼界を大きくして職場を求めるのが望ましいのであります。より高い報酬、より良き地位、それは誰しも望む処ではありましょうが、人生の価値は必ずしも収入の多寡地位の上下にあるのでなく、自ら省みて慚じない生活と、国家社会に対する奉仕と、広く人類の福祉に対する貢献とにあるものと私は信じて居ります。凡そ価値のある仕事で諸君を待ってるものは少くないのであります。例えば僻陬の地であっても、敢然として飛び込む気魄があれば、其処には、大学出身者を好遇する職場がある筈であります。或は又、技術者なり、自営者なりを目指して海外に運命を拓く途もあるわけであります。社会各方面の仕事は、知識ある人々の支持なしでは発展し得ないのであるから、豊かな人間性を持ち、専門的実力を備えている人々ならば、自らの人生行路を必ずや打開し得るものと之亦私の信ずる

所であります。

昨春我国は独立を取り戻し、世相の表面だけを見れば、如何にも経済力は多少なりとも回復したかに思われます。然し流転して止まぬ国際情勢を考え、また現在の国内政情の不安定を思えば、国歩の困難はむしろ今後に来るのではないかと憂えるものであります。之は独り我国だけの問題ではありません。勝った国にも、負けた国にも、この困難はあると思います。この苦難を如何に切り抜けるかが、凡そ世界人類に課せられた唯一のそして新しい問題ではないかと考えさせられるのであります。然し先ず日本は日本として我々は平和な文化国家を目指し、祖国の建設に孜々努力して立ち上ることが必要でありましょう。過去に於てそうであったように今も、また将来も、我々に必要なのは勤労即独立の精神であります。之こそ個人を大ならしめ、国家を繁栄に導く要素であります。

諸君は今やこの住みなれた学窓を巣立ち、大きく羽搏いて飛び立とうとする処であります。何事も出発の時が大切でありますので、猶数言を附け加えさして頂きたい。先ず第一に社会人となっても余裕のある限り勉強することであり、指導を受けた教授は勿論先輩、先人の言を謙虚に聴くことであります。また職場人としても、一般社会人としてもデモクラシーをはきちがえることなく、自己の言動に対しては飽く迄も責任を重んじ、権利に対して必ず義務を忘れないことであります。之は、当然過ぎる事柄であるにも拘わらず、口舌の徒は多くても兎角実践を欠いているのが現在の風潮であります。次は健康保持、体力増進の問題であります。心身の健康こそ、我等に取って唯一の資本なのでありまして、何事をするにしても、この資本さえあれば遂行可能なのであります。我々は他人に対する暴力を否定します。然し、人は往々自分自身に加える暴力に関しては、無関心ではないが、寛容であるように思います。例えば暴飲暴食或は自己偽瞞、偸安怠情の類であります。是等悪習は徒らに仕事の能率を下げるばかりでなく身を亡すに至るものと考えてよいのであります。我国の現状に於て憂慮すべきは、心身何れの仕事に於ても、能率低下の傾向が感じられることであります。諸君が之から接する社会に於て斯かる現実を見ることが無ければ幸であります。

諸君は明日以後、学友と袂を分って、東西南北夫々の土地に、又夫々の職場に赴くのであります。恐らく感懐なきを得ないでありましょう。之は単なるセンチとして片附けるに忍びないものであります。このセンチこそは、生涯諸君の胸中に心の故郷としての母校の姿を去来せしめるものではありますまいか。諸君何れの日か学友と相会し、『都ぞ弥生』を朗唱する機会がありましたならば、何らか諸君のエルムの学園を想起し、

有形無形を問わず、北海道大学の発展に協力して下さい。茲に再び諸君の門出を祝すると共に、諸君の前途に幾多の幸あらんことを祈念しまして送別の言葉を終ります。

（『北海道大学創基八十年史』）

23 北海道大学創基八十周年記念祝典における杉野目学長式辞

（一九五六年九月一五日）

本日茲に文部大臣を始め、国の内外から多数の来賓各位の御臨席を得、わが北海道大学創基八十周年の記念式典を挙行致しますことは、私共の最も光栄とし欣幸とする処であります。

顧みますれば明治四年、黒田開拓次官が明治天皇の命により米国に赴き、精しく視察の上帰朝、北海道開拓の雄大なる計画を樹立するに当り、その要諦は人材の養成に在りとして、明治五年以来、その教育機関を設置し、農・工・医学に関する教育の端緒を開いたのでありますが、明治九年マサチューセッツ農科大学長ウィリアム・スミス・クラーク博士を招聘、札幌農学校を開設致しました。是即ち本学の創基であります。

この札幌農学校は、我国最初の農業に関する高等教育機関でありましたが、その実体は新日本建設の先駆者の養成にあったように思われるのであります。しかも現在の所謂新制大学の理念で出発し、修業年限も四年であったことは、注目に値する処であります。

その後種々変遷し、明治二十八年より文部省所管となり、同四十年仙台に東北帝国大学が設置せられるや、札幌農学校は東北帝国大学農科大学となり、大正七年に至り独立し、北海道帝国大学が創立せられたのでありまして、その後発展の一途を辿り、医学部、工学部、理学部が順次増設せられました。その間、本学は大学予科、土木、水産両専門部、農学、林学両実科、臨時教員養成所、臨時医学専門部を包含したのであります。

かくて本学は自然科学系の大学として一応整備されたのでありますが、昭和二十二年本学多年の要望であった人文科学系学部の増設が具体化し、その第一着手として法文学部の設置を見、更にその後法文学部は文学、法学及び経済三学部に分離独立し、新たに教育学部も亦設置せられたのであります。

又、自然科学系に於ても、函館水産専門学校を水産学部として包括し、農学部獣医学科を拡充して獣医学部となし、同時に従来の大学予科は閉校、専門部等はそれぞれ統合せられたのであります。

更に本学の沿革誌上特筆すべきことは、新制大学院の設置であります。即ち十系列の大学院研究科が昭和二十八年より一斉

に開設せられたのであります。

一方附置研究所を見るに、昭和十六年低温科学研究所が設置せられて以来、触媒、応用電気及び結核の三研究所が順次設置せられたのであります。

以上の如く本学は、時代の要求と文運の発展に伴い、学部学科の増設、学生の増募、研究施設の整備を行い、十学部、四附置研究所、十大学院研究科を有する総合大学としての規模内容を拡張し、今日に及んでいるのでありまして、講座数二〇七、教職員数二千五百二十一名、学生数五千名を突破、八十年前札幌農学校が二十四名の学生と、六名の教職員を以て開始したことを思います時、誠に感慨の深いものがあり、正に驚異的発展と申すべきでありましょう。また卒業生は二万三千名を数え、それぞれ社会の各方面に於て活躍して居りますことは、聊か意を強うする次第であります。

これ偏に文政当局の深き理解と、北海道当局、故古河市兵衛氏を始め、有縁各位の物心両面に亘る絶大なる御後援の下先輩各位の拮据経営よろしきを得た為でありまして、茲に更めて深甚なる感謝の意を表すると共に、特にこれ迄受けた国の内外大学からの御指導に対しては深く之を銘記し心から御礼を申上げる次第であります。

今から八十年の昔、クラーク博士の残された精神は、現在も尚、本学園に継続せられて居りまして、幾多学生の愛着と尊敬の的となっているのでありますが、文部省、米国務省、北海道及び札幌市当局の御協力により本日この式典に故博士の令孫クラーク二世シンシナティ大学教授をお招きすることが出来、又姉妹大学とも申すべきマサチューセッツ大学マーサー総長、同シーリング農学部長等の参列を得ましてメッセージを頂きますことは、誠に意義の深いものがあります。クラーク先生の遺された偉大なる業績を想起し、両大学との深い友好関係を更新する為に大に貢献することと思われるのであります。

大学の生命の永遠を憶う時、八十年の歳月は決して長いものではありません。欧米の有名大学の設立を顧みるに、ボロニア大学、パリ大学は十二世紀に、オックスフォード及びケンブリッジ大学は、共に十三世紀に、またハイデルベルヒ大学は十四世紀に設立せられて居ります。一方米国最古のハーヴァード大学は三百年以上の歴史を有するのであります。漸く創基八十年を迎えた本学ではありますが、此等の大学とその内容を比較する時、甚しい相違を見出すのでありまして本学は僅かに総合大学としての骨格が出来上ったに過ぎないというのが実情であります。

今後各部局の拡充整備、特に戦後の急造に係る人文科学系学部学科はその内容の充実を計ると共に、更に本学は将来学術の

蘊奥を極むる附置研究所を増設して特色ある一大北方文化センターたらしめるよう努力致し度いものと考えて居る次第であります。

本学はその立地条件に於ては必ずしも恵まれて居りません。それが過去に於て本学の発展に影響がなかったといいきれないものがあります。教育並びに研究にその能率を高めんとすれば宜しくその環境に即した施設が必要であります。然るに本学の施設は大部分明治時代の老朽建築物でありますのみならず、甚しく狭隘をつげて居りますので、これが急速なる改善を必要と致します。尚大学の表徴ともいうべき図書館の新設は緊急を要するのであります。

われわれは素よりカンパスの輪奐の美のみを希うものではありませんが、教育の場、文化創造の場には自らそれにふさわしい環境が必要であることを強調したいのであります。しかし現下のわが国家財政を以てしては、この整備は洵に容易ならぬものがあるように思われます。と申しましてもわれわれはこの状態を座視するに忍びません。この度創基八十周年記念事業としてクラーク記念会館の建設を計画致しましたことも、その本旨は茲に在るのであります。

前陳の通り北海道大学は過去八十年間本道の開発と共に歩んで参ったのでありますが、今や北海道の開発は八十年前に比較し、優るとも劣らぬ重要国策となって来たのであります。即ち昭和二十五年北海道開発法が制定せられ、越えて昨三十年の第二十四国会に於て、本道の積極的開発振興に万全を期して邁進するよう、満場一致を以て議決せられて居るのであります。更に明年度より本道開発第二次五ヵ年計画が実施の運びとなって居りまして、第二次産業の振興、文化、厚生開発の基礎的調査研究に重点が置かれるように承知して居ります。乃ち本学の使命は愈々重大であって是等の開発実施の為には一層多数人材の輩出を必要とするのであります。クラーク博士の「開拓者精神」並びにかの黒田次官の道開発の根本義を「人材の養成」に置かれた先見の明に対し深く敬意を表すると共に、この大精神が新日本再建の為にも絶体に必要な条件であることを確く信じて疑いません。素より本学は大学院を有する総合大学でありまして本学の使命はあく迄も独創的研究を通じて人材を養成し、世界人類の文化の向上発展に寄与するにあるのでありますが、一方、地域社会に対する奉仕と、本学開学の経緯に鑑み、本道開発に協力せねばならないのは当然であります。

茲に本学創基八十周年を迎えるに当り、われわれは新たなる決意を以て此等の使命達成に精進し、本学の光輝ある伝統に更に光彩を添え、負荷に応え度い覚悟であります。

本日御参列の皆様におかれましては、従来にも増して御指導

御鞭韃を賜りますよう御願い致す次第であります。

以上を以って式辞と致します。

昭和三十一年九月十五日

北海道大学長　杉野目晴貞

（『創基八十周年記念祝典報告』）

24　北海道大学創基九十周年記念祝典における杉野目学長式辞

（一九六六年九月一五日）

本日ここに、谷川文部政務次官を始め、来賓各位多数のご臨席をいただきまして、北海道大学創基九十周年記念式典を挙行いたしますことは、私共の最も光栄とし、欣幸とするものであります。

周知のとおり、明治維新直後、政府は北海道の開発をアメリカ方式の農業によることとし、そのためには、まず人間の開発からということで、それに必要な人材の養成に着手し、明治五年、そのための教育機関を設置し、農学、工学に関する教育の端緒を開いたのでありますが、明治九年、マサチューセッツ州立農科大学長ウィリアム・スミス・クラーク博士およびその同僚を招聘いたしまして札幌農学校を開設したのであります。これがすなわち、北海道大学の創基であります。

したがいまして、札幌農学校はアメリカの州立大学の理念で発足し、一般教育をきわめて重要視した四年課程でありました。その後、札幌農学校は、農商務省、ついで北海道庁の所管となったのでありますが、明治二十八年に至りまして文部省に移管され、さらに明治四十年仙台市に東北帝国大学が設置されますや、その分校として拡充改組され、東北帝国大学農科大学として再出発をみたのであります。

かくて大正七年、北海道開発五十年を機会に、東北帝国大学より分離した農学部と新設の医学部からなる北海道帝国大学となり、さらに昭和二十四年、学制改革に伴いまして、函館水産専門学校をも包括して新制の北海道大学となったのであります。

このように北海道大学の歩みは、他の国立大学とは全くその趣を異にした独自のものでありまして、北海道の開発とともに現在まで歩んでまいったのであります。

現在本学は、文・教育・法・経済・理・医・薬・工・農・獣医および水産の十一学部とそれぞれに併置されております大学院研究科、その他低温科学、応用電気、触媒および結核の四附置研究所のほか、多数の研究施設を擁し、卒業生は約三万五

千、北海道の開発はもとより、学界を始め産業界、その他社会の各方面で活躍をいたしております。またかつては台湾、満州、朝鮮、樺太、そのほか北米、南米等において多数の卒業生が開発に挺身したことは特筆に値するものがあります。これはクラーク先生一行によりまして導入されました、かの清教徒の北米ニューイングランド開発精神に負うところがきわめて多いものと私どもは思っているのであります。そしてこの精神こそは、北海道大学の伝統となっていることは申すまでもありません。

以上のように、本学は時代の要請と文運の発展に伴いまして、学部、学科の増設、学生の増募、研究施設の整備を行ないまして、オーソドックスな総合大学として前進してまいったのであります。また、戦後本学は、教育研究の場にふさわしい環境の整備の必要を強調したのでありますが、それが最近ようやく進展を見るに至りましたことは喜びにたえません。これ偏に文政当局の深い理解と、北海道、札幌の地域社会、その他広く産業界等のなみなみならぬ物心両面にわたるご支援の賜ものでありまして、ここにあらためて深甚なる感謝の意を表したいと思います。

なおこの機会に、クラーク会館ならびに体育館の建設にあたりましては、各方面より絶大なるご支援をいただいたのであります。重ねて衷心より感謝を申し上げたいのであります。

本学は今後学術の進歩、社会の要請に即応いたしまして、さらに一層学部、学科の新設およびその整備、充実をはかりまして、人文社会系学部と自然科学系学部のよく均衡のとれた、個性の豊かな総合大学として発展するよう努力したい所存であります。また、これに加えまして、地域社会に密着した特徴ある研究活動を盛んにするため、附置研究所の拡充ないしは新設等も当然必要と思うのであります。そしてこのことは、ひとり学術の進歩に貢献するばかりでなく、近く開道百年を迎えますところの北海道の開発に積極的に協力するためにもまことに意義の深いものがあると思うのであります。

今や各国は、文化ならびに経済開発のために競って大学の整備、拡充を行ない、また各国民の大学によせる期待は真に大なるものがあります。すなわち、大学の使命はいよいよ重いといわねばなりません。

一方わが国の新制大学は、発足以来すでに十七年を経過いたしまして、管理運営も逐次改善を見、ようやく教育研究に成果をあげつつありますことはご同慶にたえません。しかし、今なお色々の困難な問題を抱えているのであります。さらには流動する社会情勢の中で、今後大学が如何にこれに対処するかなど重要課題に直面しているのでありますが、私共は本日の記念式

を契機といたしまして、決意を新たにし、教職員、学生が一体となりまして、叡知をもってこれを克服し、本来的使命達成に努め、国家社会の期待に応えたいと思いますので、各位におかれましては今後とも一層のお力添えを賜わりますようお願い申し上げたいのであります。

以上をもって式辞といたします。

昭和四十一年九月十五日

北海道大学長　杉野目晴貞

（『創基九十周年記念祝典報告』）

25　就任にあたって古市新学長の挨拶

（一九六六年一〇月二五日）

北海道大学創基九十周年を迎えたまさにその時点において八代目の北大学長の席をけがすことになりましたが、今更のように、九十年の歴史と伝統を背負う北海道大学の長たる者の職責の重さをひしひしと感ずる次第であります。

西欧の先駆的諸大学の歴史に比べれば、九十年は決して長いとは言い得ないにしても、その間において大学が経験した諸事実の深刻さは、数百年の歴史を持つ西欧諸大学のそれに決して劣るものではありますまい。特に、時の政局の不安定、北海道地域の開発の遅滞と経済的比重の過少評価等々の俗的事情に由来した北大の縮学の危機を、諸先輩が熱意と旺盛な気慨によって切り抜けたのみならず、更に拡大をもたらして北大の権威と栄光を保持した事実は、後輩の深く銘記しなくてはならないものでありましょう。また曾て経験したことのない敗戦を転機として、十余年前にわが国の教育組織は改変され、自らの意志でなくして旧制大学は新制大学として発足せざるを得ず、ために、大学の性格の変貌をもたらしたことは、その良し悪しはともあれ、大学史上における画期的事柄であります。このことは今なお尾を引き、教養課程の充実と位置づけ、大学院の組織化等に到るまで流動的で未定着の現状であります。

また、戦後、国民の自覚、経済力の復活成長、ベビーブーム等々に伴って、高等教育への進学希望者の激増という社会状勢に応えて好むと好まざるとに拘らず、旧制大学の急激な巨大化を招来し、北大もその例にもれずそれが今なお進行中である事実にも意を留めなくてはならないと思います。曾ての札幌農学校は、今や、一つのキャンパス内に十二学部を擁する十全の綜合大学へと成長発展し、第一期僅かに十三名の卒業生は、今日各期約二千名の卒業生となって社会に送り出す底の国際的大学になったわけであります。研究と教育が大学を支える大きな二つの柱である以上、わが北大のこのような拡大成長は、大学人と

してまことに喜びに堪えないばかりでなく大いに誇とするところでありまして、これまでの諸先輩の精進、特に杉野目前学長の並々でないご尽力に対して心から感謝するものであります。

さてこのように綜合大学として、学術的にひとり日本的のみならず国際的使命をも荷う北大を受け継ぐものとして、曲りなりにもその責めを果すために、この時点において、改めて巨大化したわが大学を顧みる、即ち身自らをふりかえってみる必要があるものと思われます。さすれば、さきに述べた教養課程の定着的位置づけ、充実の問題のみならず、巨大化に伴って自然発生的に生来される多人数教育、学生教官相互交流の喪失、画一的規格化に由来した平盤性と無独自性、各部局または部局教官間の交流の不円滑、綜合大学の特色であるべき研究上の協同作業の不在、特にビ・アンビシャスに表現される北大独自の気慨の稀薄化等々のほか、顕在しない幾多の検討改善を要する問題があるものと思われます。学内の英知を集約して、これらの諸課題を摘出し、これを表裏から充分に検討して改善の方途を思案し、課題の重大さの比重に応じて緩急の順を勘案して善処していかなくてはならない義務があるものと思います。これらの課題の解決は立派な好ましい大学に成長するために一つとしてゆるがせにできないものでありますが、しかしそれに先行するものとして、北大全教官の独自の研究に対する旺盛なる意欲と学生を愛することから発生する教育に対する強い熱情、また全学生の勉学心の一層の向上、むさぼり飽くことのない吸収欲といったものが基盤になくてはならないものと思います。一言で云えば、教官も学生もしっかりしなくては、外的条件がいくら備っても、個性豊かな香り高い学園に育てていくことはできないものと考える次第です。

幸に、北大のキャンパスは広く、美しく、なお成長発展しましても一つのキャンパス内に、充実した学術の各分野の部門施設を設定し得られます。これは内容外観ともに世界に冠たる香り高い学園を形成し得る条件の一つでありまして、わが国では、北大だけが保有する条件でもありましょう。私どもは、高い次元の意識を持ち、伝統の気慨を奮い起して、香り高く個性豊かなユニークな北大を築きあぐるべく指向して、教官学生一体となって楽しく精進しようではありませんか。

最後に、北大新聞の四十年に亘る精進と、学の内外に及ぼした寄与に対し、深く敬意を表しますとともに、さらにその高い使命を自覚して、一層の健闘と発展を祈って止みません。

（『北海道大学新聞』一九六六年一〇月二五日）

26　卒業式における堀内学長告辞

（一九六九年三月二五日）

諸君のめでたい門出にあたり、私の人生体験からしみ出た言葉を贈りたいと思います。諸君は誰も彼もが私のような学究生活を送るわけではありませんから、一般性はないかも知れないが、嘘の入らない取りえはあります。

諸君は若い、今から四十前までの頭脳の伸びは非常に著しいものであります。この機会を逃してはいけません。勉強は大学だけで済むものではありません。実社会に立っても絶えず問題に遭遇するでしょう。その問題をごまかさずに丹念に解決し、次の問題を解決する能力と自信を段々に鍛え上げていってほしい。地上の強者はこうして自分で造り上げるものであります。それには読書も一つの方法でありますが、まず考えることです。沢山本を読んで頭の中へ詰め込むのは、実際の問題の解決にはあまり役に立ちません。今考えよと云いましたが、考え方にも色々あります。我が国の通弊は天下りに物を考えることであります。十六世紀から十七世紀にかけて生きていたフランス・ベーコンが、それまでの演繹法哲学を否定して、帰納法哲学を樹てました。それが今日の科学の基礎であります。演繹法哲学は、簡単に云えば、アリストテレスはこう云った。だから世の中はこうなんだ、と決めてかかることであります。これは当時大変ヨーロッパに勢力を張っていたキリスト教の坊さんには都合が良かったので、この演繹法哲学は教会に支持されましたが、帰納法哲学の方は相当の迫害に会ったらしい。フランス・ベーコンは破廉恥罪の嫌疑を受けたり、牢屋へ入れられたりして酷い目に会っております。しかし、我が国では今でも演繹法が横行して帰納法は小さくなっているようです。戦争後はなんでもかんでも民主主義で、民主主義の名のもとに人殺しもすれば侵略もする。民主まんじゅう、民主せんべいまで出来ないのが不思議なくらいであります。私は結論として民主主義を良いものと思い、これでなければならないと思っております。それは人々の協力を自由に有効にして生産を増進し、したがって我々の生活を豊かにしてくれるからであります。そういう御利益のない教条を私は信じません。民主主義の原則によるとこうだ。それは民主主義のA、B、Cではないかと天下られますが、福沢諭吉が下級武士の家に生まれて上級武士の子供に頭ごなしにやっつけられた。我々は身分が高いんだ。だからお前は我々に屈従するのはあたりまえだと。上級武士の子供もこの頃の民主主義者も天下りに変りはありません。こういう事を云いたいのは、天下りに物を考えるのは至極やさしい事であるが、現象の語る言葉を先入観なしに解読して物事を客観的に捕える

事は大変骨の折れる事です。しかし、あてになるのは骨の折れる方です。そんなら私は天下りをちっともやらないかというと恥しいながらそう云えないのであります。私は根拠のない事を客観的事実と思いこむことを狐憑きと云っています。ある問題と取りくむ、そしてそれを解決すべく努力する。その過程で私はいつでも狐に憑かれていないかと反省します。ところがある程度やってしまうと後からやっぱり狐に憑かれていた事に気がつきます。しかし、新しい問題に遭遇すると、また狐がどこからか入り込む。絶えず厳重に警戒していないと現象の正確な解読は出来ない。諸君は少なくとも四十歳前までは急速に実力が伸びて行きます。諸君を迎える社会もようやく年功序列型から抜け出して実力の世界になろうとしています。四十歳前までに諸君は一人一人実力を鍛え上げて、本当の意味の勝利者になってほしいと思います。

それから私が学長として云うのはおかしいかもしれないが、諸君の学ばれた大学は理想から去る事はなはだ遠いのが事実です。なによりマスプロがいけない。私は現職教授の時代に専門学科の学生に必らず演習をしました。その演習の初めの時間にいつもこう云いました。君達柔道の試合をするのに柔道の本を買い込んで目を赤くしてまる暗記し、ふらふらと試合場に出て行くか、そんな事をしたら敗けるに決ってる。しかし、日本の学問の仕方は大分これに類する。柔道に強くなろうとしたら稽古をしなければならない。この稽古が演習だと。その後、私は教養部に出ました。しょった云い方ですが、経験を積んだ人間がまず手ほどきをしなければならないからです。たとえば、プランクとかゾマフェルドとか戦争前の科学の最高峰であったドイツの歴史に名を残している科学者は、教養部の学生に相当する年齢の学生に授業をしておりました。ところが教養部に行って見ると私の授業を受けるのは何んと文類の学生二百何十人。大学の教育は演習とゼミにありと言った前々からの主張を、節を屈して引っ込めざるをえませんでした。演習で模範答案をぶっつけるのはなんでもないです。それじゃどうやってそこに到達するのか学生に摑みようがない。だから一人一人の頭の中へ入っていって予備知識、発想法を調べて彼の持っている予備知識の範囲でよじ登る道を自分で見つけさせなければいけない。それを約二十人に二時間ほどやると頭がくたくたになってその日は何も考えられなくなります。これを二百何十人にやったら途中で参るにきまっているから、節を屈せざるをえなかったのです。マスプロにあってはどうしても押しつぶされる。このマスプロを平気で大学でやり出した原因はどこにあるか、昔の旧制高等学校では外国語に非常に重点がおかれておりました。それは大学に行くと先生は外国人で、英、仏、独の言葉で

講義があるので、なにはともあれ外国語を覚えて行かなければならなかったのです。その頃の外国人の先生のことをお雇い外人教師と云っていました。そのお雇い外人教師の時に法学部でも演習とゼミをやったという話しを聞いてやっぱり文化の伝統を持った国の人は違うと思いました。ところがその後、我が国には出世をするには何でも法科という法科万能の時代が来て、学生が押しかけたから、マスプロの走りが出来てしまいました。今の役人や政治家で大学を卒業したという人は大抵マスプロの走りで製造された人で、大学とはこんなものだと思ってる。国家権力の介入とか何んとかいう事を無視するわけではないが、その原因には大学教育に対する無智がある。大学とはこういうものではないのだ。それではとんでもない曲り角にぶつかるという事をじっくりわからせなければならないのであります。

私は大学は三つの原則の上に立たなければならないと思っています。それは学生の学ぶ自由、研究と教育の一体不可分、干渉なき援助の三つです。世界最初のボロニアの大学では学生が先生を雇って来たと言いますが、こんな形の学ぶ自由はそのまま残ってはおりません。しかし、戦争前世界の科学の最高峰であったドイツの大学には違った形で生きていました。授業は教授と私講師によって行なわれ、教授には定給がありましたけれども、私講師にはありません。その授業を受けようとする学生は事務局へ行って月謝を払って学生証に判を押してもらいますが、競争講座が沢山あって学生は選り取りで一番自分の学問を進めてくれる授業を受けます。したがって自分の学問を進める意欲は強く、学生が演習の催促をしてたのを覚えております。私講師の授業が悪ければ誰も月謝の払い手がないから食いはぐれです。このように学ぶ自由は先生に厳しいと同時に学生にも厳しいのであります。学生が授業を受けるのは自分の学問を進めるためで出席してれば単位をもらえるからではありません。だから教官の方でも、出来ても出来なくても出席の代償に単位を与える事もないからであります。だから何年居ても学位の取れない人もあります。一年が二学期でありますが、各学期の終りになりますと方々の大学から誰々先生が何の授業をするというメニューが出ます。学生がそれを見て一番自分に適した授業を選んで半年ごとにあっちへ行ったりこっちへ行ったりします。

いま競争講座があっていい加減な授業をすると受け手がなくなると云いましたが、その逆も現われます。先程申しましたプランクやゾマフェルドなどの一流の研究者は授業にも非常に熱心でありました。真島さんという物理学者、工学者に聞いた話ですが、プランクは郊外から地下鉄に乗ってベルリン大学にやって来る。地下鉄の乗り替えの駅で、一般力学という彼の有名な著書の今日講義する分を破り取って乗り替えの駅のプラッ

トホームをぶつぶつ云いながらあっちへ行ったりこっちへ行ったりしてそれを一生懸命勉強している。そして十七、八歳の若い学生に躍動する自分のものを語りかける。それでなくちゃいかんなぁと思いました。だからそういう先生の講義だと事務局に月謝を払わないで聞こうとする不心得者が沢山押しかけます。そうするとちゃんと月謝を払った学生の坐る所がなくなってしまう。それで入口に助手が二人頑張っていて、いちいち学生証を調べて不心得者を追い返している。学ぶ自由はない代り顔さえ出していればところてんの様に押し出してもらえる大学とは大分違うのです。また、全体としてろくな授業をしない大学には学生が寄り付きません。その大学のある町に汽車が止まると、学位はいりませんかと云う呼び売りが来るなどとひどい悪口を言われる大学もあります。このように良い学習条件を自由に選べるのが私の言う学ぶ自由であります。

それから研究と教育の一体不可分、これはゾマフェルド先生の例を取った方が早いと思います。ゾマフェルドは死ぬまで研究をした人ですが、同じ授業でも問題の捉え方が違う、平坦に並べるだけではありません。それでどの問題はどういう風に改めるのがいいかという見通しを与えられます。私も、もう亡くなられた長岡半太郎先生の講義を聞いて百戦練磨の勇士が良い教育者であることをつくづく感じました。その研究を発展させるためには、後進の養成、すなわち教育をしなければならない。したがって研究と教育とは言葉では分かれていますが実態としては楯の両面で一体不可分であります。私は触媒研究所長の時にその事を文部省の人にわかってもらうのに随分長い事かかりました。要するに日本全体として研究教育に対する認識が不足していてこの一番大切な事がなおざりにされます。

この事はよく云われる政治の貧困と無縁ではありません。さる黒い霧の代議士の選挙区の有力者が云った事が北海道新聞に出ていました。あの黒い霧の代議士は悪い事をするかもしれない、それで結構だ、我々の町に橋をかけてくれたり道路を作ってくれたりするからだ、お金をもらって誰かに投票する、これは選挙違反になるのでしょうけれども地区ごと利権で買収されるのは選挙違反にならないばかりか良心の呵責さえないらしい。悪い事をして利権あさりをする代議士を出せば余所だって同じ事をして対抗するようになります。そうすると政界は利権漁りの修羅場になって政治の貧困と腐敗が必然的に現われ文教どころではなくなってしまう。文教委員にされると利権漁りに縁がなくなって票が集まらなくなるので文教委員はどこの政党でも嫌われるそうです。

十九世紀の初めにナポレオン軍の侵入にあってプロシアが目茶目茶に踏みにじられた時にフィヒテがドイツの将来は研究教

育にありと言いましたが、現在研究教育の重要性はその時代どころではありません。ところが日本ではその時代ほども重要性が意識されていません。

諸君は各方面に活躍されて周囲の人々に大きな影響を与える人であります。みんな街頭に立って演説をやってくれとは申しません。知らず知らずの間に地域ごとの利権で買収される事がどんなに悪い事か、それが国民の将来を暗黒にするのだという事を、言わず語らずのうち諸君の周囲の人に浸透させていく事が出来ると存じます。私もその蒙を啓く事に余生を捧げるつもりですが諸君も大いに協力してください。良い国を次の時代に伝える事に生甲斐を見い出そうではありませんか。

これが諸君に贈る私の言葉であります。

昭和四十四年三月二十五日

北海道大学長　堀内寿郎

27　入学式における丹羽学長告辞

（一九七二年四月二〇日）

私はここに衷心より諸君にお祝いを申しあげ、喜んで諸君を本学にお迎えいたします。

北海道大学は、御承知のとおり明治政府が北海道開発に必要な人材を養成する目的で設けた札幌農学校をその前身としております。札幌農学校の開設は明治九年のことですので、本学は既に一世紀近い歴史をもっていることになります。この一世紀間、本学は、時には非常な苦難に遭遇しましたが、先人の努力によって、よくこの苦難にうち勝ち、めざましい発展をとげてまいりました。学生数だけからいいましても、創設当初の札幌農学校は、第一回の入学生が十一名、第二回のそれも十八名にすぎませんでした。それが、現在の北海道大学は、大学院学生も含めて毎年二、五〇〇人以上の学生を迎えいれています。これは、本学が科学の発展に応じ積極的に社会の要請にこたえて、次々に新しい学部・学科・研究所を設けてきたことによるものでありまして、現在、本学は、十二の学部と四つの附置研究所、その他多くの研究施設を有する一大総合大学であります。

しかし、申すまでもなく、大学は、その規模の大小だけで、真価がきまるものではありません。初期の札幌農学校は、今日からみますと、僅かの学生しかいない誠にささやかな学校でありましたが、そのなかから、ウィリアム・スミス・クラーク博士のピューリタニズムと開拓者精神をうけついだ偉大な人物を輩出しました。内村鑑三、新渡戸稲造といった、諸君もご存知の明治日本の先覚者たちが、諸君の大先輩にあたるわけであります。また、札幌農学校は、その創設時に米国はじめ世界各地から、当時最新の科学・技術を実に大胆に取入れ、このため本

学はその後永きにわたって、農学・林学・水産学・生物学などの分野で日本の学界をリードしてまいりました。

私は諸君が、本学で学ばれることになったこの機会に、諸君の先輩の時代にさきがけて困難に立ち向った開拓者精神と新しい学問研究の方法を積極的に導入し、また開発してきた本学の伝統に思いをいたされ、本学の建学の精神に学ばれることを切望してやみません。

この建学の精神は、現在の北海道大学にも生きており、また生かしていかなければならないものと、私は信じております。特に、近年のように、めざましい技術革新や経済成長にともなう、公害問題などの発生とも関連して、世界的規模において、大学における教育・研究のあり方が根本的な再検討をせまられている時、わが北海道大学においては、その建学の精神から申しましても、遠い将来をも展望した大学改革を構想し、かつ実施してゆくことが、重要な課題となっております。そして、現に、本学は、数年来、学内の英知を結集して、改革の問題に自主的にとりくんでおります。もっとも、ことは、人類の将来にかかわる科学・技術のあり方と人間の教育の問題でありますので、一朝一夕に結論をえることは期待できません。大学を構成している人々がすべて、それぞれの場で、学生諸君は学生としての場で、自分の問題として、これからの大学のあるべき姿を理性的に考えてほしいと思います。

さて、諸君は、このような伝統をもつ北海道大学で、このような時期に、大学生活のスタートをきられるわけですが、この機会に私は、さらにいくつかの点について、私の考えと希望を申しのべ、諸君のこれからの大学生活の参考に供したいと思います。

その第一は、大学というものが本来は、自分で問題を発見し、それを解明してゆく知的能力を養う場である、ということであります。大学における諸先生の講義も、この意味では、そのような能力を開発する手助けにすぎないとさえいうことができます。新入生諸君は、指導され、教育されるというこれまでの受動的・消極的な姿勢から一日も早く脱皮し、自ら進んで諸先生の門をたたくとか、自然の観察や読書を通じて、自ら学びとるという能動的・積極的な姿勢を身につけてほしいと思います。

近年わが国では子供に対する親の過保護ということがいわれておりますが、これに、恐らく、受験勉強という特殊な型の学習の習慣も手伝ってか、大学に入ってからも、自分で問題を発見し究明してゆくという、自主的な学習態度を欠いている学生が少なくないように思われます。これは私の甚だ遺憾に存じているところでありますが、特に大学において大事なことは、単に多くの知識を吸収して博学・博識になるということではな

く、自分の力で深く掘りさげて自主的に思考する能力を涵養することであります。

情報過多といわれる現代社会においては、われわれの知識の吸収の仕方も、ともすれば受動的になり、われわれの行動は、理性的な判断よりは、情緒的なものに左右されがちでありますが、それだけにますます、自学自習の習慣を通じて自立の精神を養うことが必要になってきていると思うのであります。

第二に、今申した学習態度と直接関連することですが、人文・社会・理工・農医系など広汎な学問諸分野を包含する総合大学としての北海道大学の特色を、真に活かすような勉学と研究を、諸君が早くから心がけていただきたいと考えます。

このことは、現在の諸君にとってはさしあたり、入学して最初に学ぶ「一般教育」の学習の仕方ということになりましょうが、ここでは、私が現在提唱しております「環境科学」(field science) なるものを例にとって、お話ししてみたいと思います。今日、各種の公害への対策は、誠に急を要する問題であり、それと同時に自然保護の必要が強く叫ばれております。われわれをとりまく自然の諸現象を正しく解明し、人間社会と調和するように自然界をコントロールする技術を獲得することは、現代の科学者に課せられている急務であります。

しかし、われわれの周りの環境における高次で複雑な自然現象を真に解明するためには、実験室内で単純化された現象を分析的な手法を用いて追究してゆくだけではなく、このような自然現象を自然の場で直接対象とするような研究が、どうしても必要であります。これが環境科学でありますが、これに本格的にとりくむためには、自然に対する多面的で総合的なアプローチが必要であります。つまり、個々の専門分野の枠内にとじこもった立場からの研究ではなく、様々な専門の自然科学者が協力して研究してゆく体制が必要なのであります。そして、その意味からも私は、既成の専門分野の型にはまりきっていない若手の研究者が沢山でてきてほしい、と考えております。

同様のことは、社会の既成の価値観が根本的に問題にされつつある今日、人文・社会系の学問についてもいえるように思いますが、要するに、ここで私が諸君に申したいことは、必ずしも既成の専門分野の枠にとらわれない、総合的な視野を育てるような学習態度を、今から心がけてほしい、ということであります。様々な専門分野を網羅している総合大学としてのこの北海道大学の特色を、諸君の側から、主体的・創造的に活用してもらいたいのであります。

第三に、諸君に望みたいことは、くれぐれも健康に留意してほしい、ということであります。健康な身体は、これからの諸君の勉学や研究生活の基礎であるばかりでなく、大学を出てか

らも生涯諸君の幸福の基礎になります。多かれ少なかれ、これまでの受験勉強で諸君の体力は衰えているのではないか、と思うのですが、回復力の早いこの時期にその体力を早くとり戻すとともに、さらに積極的に、これからの体力づくりにはげんでほしいと思います。そのためには、北海道大学には多くの運動部もあり、諸君の入部を待っています。それから、この身体の健康とともに、心の健康、つまり精神衛生の面にも、充分注意してほしいと考えます。いろいろと精神的なストレスの多い現代生活を生き抜いてゆくためには、精神もまた健康でなければなりません。

北海道大学には、学生諸君の健康管理のために診療所があります。これは、本年度から保健管理センターとして、さらに充実される予定でありますが、ここでは、それぞれ専門の先生方が、諸君の心身の健康の保持について適切なアドヴァイスをしてくれるはずです。こういう機関も積極的に利用して、常に明朗で健康な学生生活をおくってほしいと思います。

最後になりましたが、第四に申しあげたいのは、大学と学生諸君の社会的責任ということであります。今日大学についても、学生についても、これを見る社会の目には非常にきびしいものがあります。このことは諸君もよくご存知と思いますが、社会の批判に対してわれわれは、誤解は誤解としてこれを正しながらも、素直に耳を傾ける態度をもたなければなりません。大学は今や、象牙の塔とよばれたかつての大学のように、社会から隔絶した存在ではありません。現在の大学は、現代社会において必要とされる専門的知識と自主的で創造的な能力を備えた人材を養成する場であり、研究面においても、大学の外の事象に対して目をつむるのではなく、むしろ社会の問題を先取りして、新しい学問研究の場をつくり出してゆく積極的な心構えがなければなりません。そしてこのような心構えが、今日いわれている、開かれた大学への脱皮をも可能にするものと私は考えています。学生諸君も、現在の大学のこのような社会的責任を理解され、かりそめにも、大学をもって、現代の市民社会とは別の特殊地域であるかのように誤解されることのないよう希望いたします。

また諸君は、多数の入学希望者の中からえらばれて、本学に入学しましたが、諸君の力だけでこの大学に入ることができたのではありませんし、本学は、学生諸君のおさめる授業料で運営されているものでもありません。高等教育機関としての大学、とくに国立大学が存立している背景には、いうまでもなく、日本の社会全体の大学教育に対する強い期待があり、それ故にまた納税者たる国民も、国立大学の運営のために国の莫大な予算が使われることを認めているわけであります。そしてこのこ

とは、諸君が日本の社会から大きな期待をかけられ、同時にそれにともなう大きな責任をおっていることを意味します。

私は諸君が、この社会の期待と自らの社会的責任について深く思いをいたされることを強く希望いたします。諸君は、間違っても、思いあがったエリート意識をもつようなことがあってはなりません。また、学生たる身分に甘えて、市民社会では通用しないようなことをすることが、大学の内であろうと外であろうと許されないことも、勿論であります。

以上、私はいくつかのことについて申し述べましたが、これをまとめてみると次のようになろうかと考えます。諸君が心身ともに健康で若いエネルギーをもちつづけ、北海道大学の建学の精神をうけつぎ、総合大学としての本学の特色を生かす心構えで、自主的に広く深く考える能力を養い、同時に大学と学生の社会的責任についても真剣に考え、社会が諸君によせている期待に充分応えられる人間として成長されること――このことを私は、心から願ってやまないものであります。

これを以って私の告辞といたします。

昭和四十七年四月二十日

北海道大学長　丹羽貴知蔵

（『北大時報』）

28　年頭にあたって丹羽学長の挨拶

（一九七三年一月）

全学の皆さん、明けましておめでとうございます。

昨年中は一方ならぬご厚情とご協力を戴き誠に有難度う存じました。一年間を通じ、各部局より種々忌憚のないご意見を頂戴し、特に道内各地の諸施設訪問に際しましては、関係各部局の方々より建設的な進言を賜わり、感謝に堪えないところであります。

ここ数年来の学園紛争を通して、本学も数々の試練に堪えてきたわけでありますが、この体験から、わたくしは学長就任当初より次の三つの柱を基本方針として改革を進めてゆきたいと申し上げてまいりました。

その第一は、一般教育の充実であり、第二は、大学院の確立、第三には、環境の整備充実であります。

申すまでもなく、大学は人造りの場であります。これは先ず環境をよくすることから始まるのであり、それがためには、教育環境および学生の生活環境の改善に努めなければなりません。このことが、また、一昨年私が各学部訪問の結果、知り得た皆さんの共通の熱望であったと思っております。

そこで、一昨年来、本学の環境整備計画につき、施設計画委

員会等に審議をお願いするとともに、政府に対しその予算措置を要求してきたのであります。これら関連委員会において審議されている事柄をふまえてとりあえず考えている環境整備計画の基本構想の大要は次のとおりであります。

一　構内交通計画については、歩行者優先を原則とし、歩・車道の明確な分離に加えて、札幌キャンパスの中心線の役割を有するシンボル道、部局相互を結ぶ連絡道、防災道、遊歩道を設置し、道路を機能的に分類する。また、周辺地区との連続性を確保するため、出入口を計画的に配置する。駐車場は公共道路と接するスペースに集中設置し、都市との一体性を確保するとともに、今後の車の増加に対処するための交通管理を容易ならしめる。

二　緑化計画については、エルムの森、中央ローン、原生林、ポプラ並木等本学の伝統的景観を保護し、逍遥のための遊歩道を設け、グリーンベルトを設置して、思索と憩の場として人間性の回復を図り、さらに対話から生ずる大学人共通の意識の場とする。さらに積極的に植樹計画を促進し、本学独自の自然的景観を失わないで学問の府としての落ち着いた雰囲気を造る。

三　文化財保護計画については、構内に残存する埋蔵文化財包蔵地を保存し、将来の文化の発展の向上を目指す。また、旧農学部校舎、旧図書館等本学の記念すべき建物、並びに既に国の重要文化財に指定されたモデルバーンを含む数棟の建物は、本学の創設期に建てられたもので、北方における近代文化の原動力を象徴するものとして、これを後代に伝えるのは本学の義務である。

四　基幹設備の整備計画を強力に推進するためには、先ず整備に著しい障碍となる老朽施設、架空線、不用地下埋設物等の構内不要施設を撤去・整備する必要がある。特別高圧受電設備、基幹排水設備の整備は既に終了したが、各所に散在する暖房および給水の供給源を包括的に集中して能率化し、高圧管による都市ガスの引込みを拡大し、学内でも圧力調整を行なう等、将来の需要量の増加にも十分に耐えるよう機能の整備が不可欠である。従って、これら中枢的動脈を統合管理する共同溝の新設が必要となる。

以上に関し、札幌キャンパスの環境整備を年次計画を以て完遂する第一歩が本年度より開始される予算の見透しがつきつつあることは、誠に御同慶の至りであります。

次に一般教育の充実についてであります。この点に関しては、先ず学科目制と講座制の格差是正の問題があり、国大協の第一常置委員会を通じ関係各方面に要望中であります。学内では、改革検討委員会のⅡ―1専門委員会より出された答申につ

き、各部局で御検討戴いているところでありますが、学生には、入学当初より大学生としての自覚と、勉学に意欲を持たせるよう、教官には、ひとりひとりが、教育研究に責任と意欲を強く持って戴くよう、一日も早き改善を望みたい。

さらに、大学院の確立については、近代科学、社会情勢の推移に伴い、旧来の学科・学部・専攻・研究科に捉われない境界領域あるいは学際領域に亘る専攻あるいは研究科の構想により、組織的に従来の学部・学科、あるいは研究科より独立させ、別個の教官・事務組織を持つ大学院を組織的に確立させ、充実させることが望まれる時代に来ていると考える。教官の皆さんの御熟慮を期待したい。

なお、本学があと三年余で創基百周年を迎えようとしていることに昨年触れたのでありますが、本学が過去百年間、北海道の発展に寄与した役割を想起し、今後とも、道民全体の文化・社会生活の向上に役立つことを念じつつ、北海道全体の御協力を得て、本学百周年にふさわしい記念事業を推進すべく、準備を開始しなければならぬと存じます。教職員・学生・同窓生諸氏のご理解とご支援を切に望む次第であります。

最後に、本学が世話大学の役割を仰せつかっておりました、国立旭川医科大学の創設が決定し、本年開校の見透しとなりましたことは、誠に喜びに堪えないところであり、関係各位の御協力に対し、心から感謝いたしますとともに、今後とも何分宜しくお願い申し上げる次第であります。

（『北大時報』）

29　入学式における今村学長告辞

（一九七六年四月一六日）

新入生諸君、入学おめでとう。

本日ここに諸君を迎え、名誉教授の諸先生をはじめ、御列席の皆様方と共に、昭和五十一年度の本学入学式を挙行する運びとなりましたことを、私は、大変嬉しく思っています。

申す迄もないことでありますが、入学式と卒業式は、学校教育のはじめと終りを締めくくる、学校にとりましては最も重要な行事であります。しかるに、本学におきましては、昭和四十四年の大学紛争以来、永い間中止の儘となっておりました。ようやく昨年になりまして卒業式が挙行されることになり、本年度からは、入学式も挙行の運びとなったのであります。このことは、時勢の移り変りもさることながら、大学の機能回復のために教職員の方々が払われた絶大な努力と、学生諸君の良識ある態度の積み重ねのしからしむるところでありまして、まことに御同慶にたえない次第であります。

さて、今年もまた、二千をこえる俊秀が、全国各地から我が

北海道大学を目指して集って来られました。まことに頼もしい限りであり、新入生諸君に対しては、心から歓迎し、且つ、祝意を表したいと思います。それと共に、御祝いの言葉は、本日御列席の方も多いと思いますが、諸君の御両親をはじめ御家族の方々や、諸君をこれ迄導いて下さった先生方にも、同様に申し述べたいと存ずる次第であります。

新入生諸君は、これから四年あるいは六年の間、我が北海道大学の学生として、諸君の最後の学生生活を送られることになるのでありますが、このことについて、諸君は今どのように考えておられるでしょうか。それはいいかえれば、大学において学ぶことの意義をどのように考えるかの問題でもありますが、諸君は、これまで、あるいはまだ、十分には考えて来られなかったことかも知れません。

諸君は、大学に入りたい一心でこれ迄勉強して来られた。それは何のためかといえば、出世コースへのパスポートを手に入れるために、名のある大学へ入りたいからであったかも知れません。もしそうだとすると、首尾よく北大に入れたからには、目的の半ばは達成されたも同然、ということで、あとは、何とか一流企業にもぐり込めるよう、適当に優をかせいでおけばよい、という心境にもなり兼ねないのではないかと思われるのであります。

しかし、ここでは先ず諸君に注意しておきたいことは、学歴社会の落し穴に、はまり込むことのないように、ということであります。

学歴社会とは、学歴が物をいう社会ということでありまして、誰でも、高い学歴があればそれにふさわしい仕事があるというのは、停滞的でない活力のある社会の特色を示すものともいえるのでありますが、その際尊重されるのは、学卒者の、実力ではなくて学歴に過ぎないというところから、屢々学歴無用論が主張されています。また最近のような、経済の低成長時代には、大学卒業のメリットはなくなった、ともいわれておりますが、そうなればなる程、学歴による選別が激しくなって来ていることも、日頃の報道によって、よく知られているところであります。

しかし、学歴によって人の価値が左右されるものではないことはいう迄もありません。諸君が北大に入学出来たということは、まぐれでなければ、諸君がすぐれた能力の持主であることを示すものではありますが、入試に現れた能力が人間の値打をはかる唯一の尺度でないことは、むしろ当然のことであります。従って、諸君のすぐれた才能は大いに伸ばして貰いたい。しかし、心のつめたい秀才は、どんな学歴があろうとも、人間としては屑であることを思うべきであります。

幸い我が北海道大学は、北の大自然に抱かれた百年の歴史の中で、都会風のこせついたところのない、大らかな学生気質を育て上げて来ました。これは、諸君の先輩が残してくれた貴重な遺産でありますが、最近の受験競争の激しさや、世にみなぎる出世主義の風潮は、これを危うくするものではないか、をおそれています。どうかそういうことのないように、これを先ず諸君にのぞみたいと思います。

従いまして、諸君が、北大生らしい、心豊かな学生生活を送るのであれば、学歴社会の落し穴などを心配する迄のことはないのでありますが、一言申して置きますならば、学歴を笠に着た思い上りは、諷刺画の材料でしかありません。自己の力を省みず、学歴の上にあぐらをかくことを許す程世間は甘いものではありません。北大に入ったので一安心などということは、愚の骨頂であることを知るべきであります。

さて、ここで私は、諸君と共に、大学教育ということの意味について、多少考えてみたいと思います。

学校教育法によりますと、「大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道義的及び応用的能力を展開させることを目的とする。」とあります。これは法律の文章なので、いささか分かりにくいところがありますが、「広く知識を授け」られたり、「深く専門の学芸を教授」されたり、「知的、道義的及び応用的能力を展開」させられたりするのが学生諸君だ、ということであります。但し、「深く専門の学芸を教授研究する」といいましても「学術の深奥をきわめる」のは、大学の中に置かれた大学院の目的ということになっていますから、学部段階では、まだそこまではゆかなくてもよいわけであります。また「広く知識を授け」るというのは、学部の専門教育の前段階たる教養部における教育を指し、両者相俟って学生諸君の「知的、道義的及び応用的能力の展開」に資するのが大学教育の目的である、ということになるわけであります。

しかし、これらは申す迄もなく表面的、外形的なことであります。教育そのものの目的は、ここには示されていません。それについては、教育基本法第一条に定めがありますが、これは、諸君も御承知の事かと思われますので、それをここで繰返すのはやめておきましょう。要は、それは、次の世代を担う国民の人間形成に必要な教育を施し、人類社会の発展に資することにある、といってよいのであります。そして、その最高の段階にあるものが大学教育であることを、学校教育法の規定は示しているのであります。ということは、諸君には、人類社会の最高の知的、精神的遺産を継承し、発展させる社会的責任がある、ということでありまして、私が本日、とくに諸君に訴えた

いのは、この点であります。

私は今、教育の目的は、次の世代を担う国民の人間形成にあるのだ、と申しました。ここで考えておりますことは、単に倫理的な狭い意味での人間形成ではありません。より広く、人文、社会及び自然科学の各方面にわたって、現代の文明社会を維持し、よりよいものに発展させていく資質の開発を意味することであります。このような教育なくしては、現代社会は、将来の発展を期待し得るどころか、たちまち崩壊し、ゴースト・タウンと化せざるを得ないでしょう。この意味では、教育は、われわれの、次の世代に属する国民に対する責任であり、諸君は、これを権利として受取ってよいのであります。

そこで、諸君の立場に立ってもう一度この問題を考えるなら、諸君には、教育を受ける権利がある。これは、憲法第二十六条が「すべて国民は、法律の定めるところにより、その能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利を有する」とはっきり定めているところでありますが、諸君の教育を受ける権利ということのうちには、二つの意味が含まれています。その一つは、次の世代に生きる人間としての権利であり、他の一つは、次の世代を背負う人間としての権利であります。そして、ここで注意してほしいのは、前者が個人的権利であるのに対し、後者は、旧世代に対し、新しい世代に属する者の有する社会的権利というべきものだということであります。この社会的権利が、同時に、教育を受けた各個人の、社会に対する義務を生みだす因となるものであることは、見易い道理であろうと思います。

そして、国立大学において最高の教育を受ける諸君には、とくに、このような意味での社会に対する義務乃至責任が重いことを、ここでは強調したいと思います。すなわち、諸君が、我が北海道大学において充実した教育を受けることは、もとより、諸君にとって大きな利益となることであります。では、それがなぜ可能なのか。自分が秀才で、入学試験を突破したからだ、というようなことしか考えないのは、まことに浅はかなことであります。

国は、諸君に期待して、巨額の教育予算をつぎ込んでいます。断っておきますが、ここでは、国家予算の中に占める教育費の割合を問題にしているのではありません。また、その絶対額において、現状で十分だなどといっているのでもありません。ここでいいたいのは、大学の経費の主たる部分が、究極においては、税金として、諸君の父兄のみか、子弟を国立大学に送っていない多くの人々の、すなわち、社会全体の負担となっていることであります。諸君は、社会全体の負担において高度の教育を受けるのであります。しかも、その利益を享受し得る者は、大学進学希望者のほんの一部に過ぎません。そうである

以上、諸君には、大学で受けた教育の成果を、何よりも社会に還元する大きな責任がある。諸君は、今、この時点において、このことを十分に自覚していなければならないのであります。

明治憲法時代の大学令には、「大学ハ国家ニ須要ナル学術ノ理論及応用ヲ教授シ並其ノ蘊奥ヲ攻究スルヲ以テ目的トシ兼テ人格ノ陶冶及国家思想ノ涵養ニ留意スベキモノトス」と定められていましたが、先程読み上げました学校教育法の規定が、このような国家主義思想の否定の上に成り立っているものであることは、明瞭であります。それは、憲法及び教育基本法の示すところでもありますが、国家主義のアンチ・テーゼは、当然に、人類社会の永遠の幸福ということに求められなければならないでしょう。これはまことに壮大な目標でありますが、同時に、大言壮語することによっては、その目標は達成されません。

諸君は、着実に、しかも常に批判的精神を忘れることなく、諸君の能力を研磨して下さい。諸君の、みずみずしい頭脳が、何ものにもとらわれることなく、古い因襲のとばりを切り開き、新しい途をさぐってゆかれることを大いに期待したい。それが、諸君に課せられた社会的責任を果す所以なのであります。私は、去る三月二十五日の卒業式に際しては、卒業生諸君に対し、クラーク博士が百年前の札幌農学校の開校式の際に述べられた「ロフティ・アンビション」(lofty ambition)の語をはなむけの言葉と致しました。ロフティ・アンビションすなわち「高邁な志」とは、本日のお話に即していえば、諸君が、諸君に課せられた社会的責任を果す意志ということになりましょう。従いまして、それは、諸君が在学中から堅持していて貰い度い志でもあるのです。

最後にもう一つ。諸君はくれぐれも健康に注意して下さい。そして、これからの四年乃至六年の間。心身共に充実した学生生活をおくられることを心から期待して、この告辞の結びといたします。

昭和五十一年四月十六日

北海道大学長　今村成和

(『北大時報』)

30　北海道大学創基百周年記念祝典における今村学長式辞

(一九七六年九月一五日)

本日ここに、文部大臣をはじめ、国の内外から来賓各位多数のご臨席を得て、北海道大学創基百周年の記念式典を挙行いたしますことは、私共のもっとも光栄とし、かつ、心から喜びとするところであります。

顧みますれば、今から百年前の明治九年八月一四日、札幌農学校の開校式が挙行され、ここに、本学の歴史の第一頁が開かれたのであります。その後東北帝国大学農科大学、北海道帝国大学の時代を経て今日に至る沿革の概要につきましては、別にご報告申上げることになっておりますが、ここで一言申し述べますならば、わずかに、三名の外人教師を含む六名の職員と二四名の生徒によって開校式を挙げた、北海道開拓のための一農業教育機関が、百年の星霜を経て、四千数百名の教職員と、一万一千余名の学生を擁する、わが国屈指の総合大学に迄発展し、その間、社会の各方面に活躍する四万四千余名の卒業生を世に送り出すに至りましたことは、わが国学制史上におきましても、きわめて注目に価するところと思われるのであります。

しかし、これは決して、偶然の所産ではありません。札幌農学校創設のために、ウィリアム・S・クラーク博士が、米国マサチューセッツ農科大学長の現職の儘来札され、僅かな期間のうちに、近代的な大学としての基礎を固め、かつ、すぐれた校風を礎き上げられたこと、同校第一期生としてその直接の薫陶を受けられた佐藤昌介先生が、明治一九年札幌農学校教授になられて以来、同二七年には同校長に就任、その後、昭和五年北海道帝国大学総長の地位を去られる迄の四十数年の間、本学発展の歴史を一身に担ってこられたこと、この輝く両巨星をはじめとし、初代札幌農学校長調所広丈先生およびこれに続く歴代の校長、総長、学長の方々、その下で、教育と研究に打込んで来られた部局長並びに教職員の皆さん、これらすべての人々の献身的な努力なくしては、今日の北海道大学は、到底あり得なかったでありましょう。

それ許りではありません。地域社会の方々の北大に寄せられた愛情と期待が、北大の発展を力強く支えて来ました。古くは、札幌農学校の大学昇格運動、大正期の帝国大学設立運動、近くは戦後の法文系学部新設運動、これらは皆その結晶でありました。

そして更に、国立大学としての本学の今日を礎き上げる上に、何よりも大きな力をかされた歴代の文部大臣はじめ当路の方々。

私共は、本日のこの記念すべき式典に際しこれら本学のために尽された方々の余りにも多いことに、改めて深い感銘を覚えつつ、ここに深甚の謝意を表する次第であります。

また本日は、マサチューセッツ大学長ウッド博士、ポートランド州立大学長ブルーメル博士をはじめ、海外からも、多くの先生方のおいでをいただいております。これら諸先生をはじめ、本学における教育・研究の進展のために寄与して下さった国内外の多数の先生方に対しても、心から感謝の意を表したい

と思います。

さて、わが北海道大学は、このように、実に数多くの方々の力によって、今日の大をなすに至ったのでありますが、その核心を為すものが、今日にいたるまでの本学を守り育てた諸先輩の、教育と研究に対する情熱であったことは、申すまでもありません。とくに、札幌農学校時代に蓄積された人材が、帝国大学への発展の原動力となり、本学を今日あらしめる基礎となったのでありまして、ここに私共は、クラーク博士の教えであるビー・アンビシャスの精神が、先ずその膝下において、花開いたのをみることができるのであります。

そして私共は今、わが北海道大学の第二世紀に向って、大きく羽ばたこうとしております。それは、諸先輩の志を受継ぎ、発展させることに外なりませんが、私共は、今何を目指して羽ばたこうとしているのでありましょうか。

ここで重ねて、古い農学校時代を想起いたしますならば、ある一期生は、開校の翌年、クラーク博士が帰国される際に、級友を代表して博士に送った手紙の中で、次のように述べています。

「人は皆、私達の学校を大変貧弱だと考えていますが、実は、賢者（Wise man）が巌の上に建てた家のようなものですから、いずれその名声は国中にとどろき、遂には地球の反対側にまで達するでしょう。」

又、二期生の中で、後年それぞれ著名な教育者、宗教家、学者となった新渡戸稲造、内村鑑三、宮部金吾の三人は、卒業も間近いある日、

「札幌を、かつてソクラテスを出し、プラトーを出し、アリストテレスを出したアゼンスたらしめん。」

と誓い合ったという話が伝わっています。

これらのことは、当時にあっては、多分遠い未来の夢だったことでしょう。しかし、そういう夢を抱かせる何ものかが、当時の農学校にはありました。そして、この一期生の夢は、今や現実のものとなり、本日の式典には、まさに地球の反対側からも、お客様をお迎えしています。

また、札幌を、国際的な学術文化の中心地たらしめんという願いも、今では、私共の肩にかかった現実の責任となっています。わが国有数の総合大学に迄発展したわが北海道大学の、これは、学界における当然の責務といわなくてはならないでしょう。

このように、遠い草創期の先輩が夢みたとおり、学問の国際的環境の中で重要な役割を果しつつ、限りない前進を続けることにこそ、第二世紀におけるわが北海道大学の姿があらねばならぬ、と存ずる次第であります。

しかしながら、私共はまた、同時に、もっと足下を見詰めなければならない必要にも迫られております。

現代における科学技術文明の飛躍的な発展は、私共の社会生活を豊かなものにいたしました。それを可能ならしめているものが、大学教育の普及による教育水準の向上にあることは、申すまでもないことでありましょう。

しかるに、今日におきましては、科学技術の発展のもたらすマイナス面の影響が、非常に大きくクローズアップされて参りました。これに対しては、人類は、制禦能力を失うに至ったのではないか、とさえ憂えられているのであります。もとよりこれは、ひとり大学の責任にのみ帰すべき問題ではありません。しかし、学問の発達が、大学における教育と研究の細分化をもたらし、それに伴う大局的視野の喪失という現象を生じたことに、その原因の一端があるといたしますならば、私共は、かつて夢多き青年の数多くを育てた初期の札幌農学校におきましては、単なる技術教育の域をこえた巾広い、全人教育が実行されていたことを、ここでも想起せざるを得ないのであります。

そして今私共は、大学改革の中心課題として、教養課程の改革に取組んでおりますが、これはまさに、新しい人間形成教育の在り方をまさぐりつつ、この問題の解決に、一歩でも近づくことを目的としているのであります。

しかしながら、もちろん問題は、これだけのことで片付く性質のものではありません。大学における教育と研究の全般に亘る問題が、そこに横わっているのであります。戦後科学者は、平和のために生きる決意を新たにいたしましたが、今や私共は、人類社会への奉仕を目指す学問の在り方について、真剣な反省を怠ってはならぬ時期に際会しています。そしてそのためには、人文・社会・自然の各分野を網羅した、一大総合大学としての本学の特質は、十分に生かされなくてはならぬでしょう。私共は、狭い専門領域に閉じこもることなく、他の分野との学問的並びに人間的交流を密にし相携えて人類社会の発展に尽したいと思います。

百年前の開校式に際し、クラーク博士は、ロフティ・アンビション（高邁な志）をもて、と生徒達に呼びかけました。百年後の今日も、同様に、ロフティ・アンビションを額に掲げて、われわれは前進を続けなければなりません。それが、私共に課せられた使命であることを述べて、この式辞を結びたいと存じます。

昭和五十一年九月十五日

北海道大学長　今村成和

（『北大時報』）